

「其位なら止め了へば可いのに。」

「我には許せ敷島の道よ。」

「祇ら好きでも彼ばかりは嫌だなア。」

と福山は衿に差した楊子を抜いて早鐘漿を付けた齒の間を掘くり始める、松島は直ぐ眼を付けて、

「君ア鐵漿を付けた儘飯食つたのかい？不味いちやないか。」

「だつて又付けるのは面倒なもの。」

「不性だあア、一體女形は不性らしいよ、そして君なんか左様でも無いやうだけれ共、淺間……」

と言ひかけて不計二人は最前の隣の話し時を思ひ出したが其儘、

「……の大將なんかは其上人遣が荒くて客齋でね負けに最一ッ大食ひだ、中にも大の好物は薩摩芋だ、其辯女も嫌ひぢや無いなんか滑稽だね、怨の深い處が能く分ら。」

「た止しなさいよ、若し耳に這入つた時悪いからさ。」

「同病相憐むか。」

「僕さるか……失敬ぢやないか。」

「アツハハ、ハハ。」

暫くは面白さうに身を揺して笑つたが、相手が乗らぬので黙つて了ん。

「處で最前話した事さ。」

「……………」

「たい怒つたのかい、小心な男だな。おい福山、夫でも君……如何したのだ、聞いているんかい。」

「聞いて升よ。」

「夫でね……………」

話しかけた處へ、

「へい今晚は、ね二人差向ひさは恐れ入りやした、拙もお仲間入を致しやせう。」

「誰だいな驚かせやがる恐ろしい、黄ろい聲を出しやアがつて。」

松島が出て見れば、明き井を取りに来た岡政の小僧が膝切の市杵の單の胸の處を紐で結んだ筒袖を着て、半股引と腹巻の眞白のを見せ、凛々しい顔で夫はく滑稽けてによ

つらり立して居る。

(二十二)

『如何したのかい昨夜は！』

筑波の書齋に朝涼の風を背に受け乍ら、箕座をかいた加奈村は、焦茶地島縞の單物に、
糸系紋縞の兵児帯を尻つけに締め、織綿のある黒絹の羽織に、紋は丸の中にKの字
の背中合せを染め抜いて五ツ處、オリヅ色の革製の短かい卸掛の紐を付けて居る。帯の右
脇に巻いた赤と緑と絞交せの麻糸は、此人がわざと選んだ時計の紐なので、去る主人筋の
歸朝土産だとの觸れで、厭になる程撫でつ摩りつ可愛がる其時計の、日本出来には見る事
の叶はぬ程美しく可愛らしく立派な物丈に人の目も引けば噂にも立つて、より／＼毎に其
主人とは？其紐は？との問題も起るけれど、當つて聞けば例の「うふ」に受け流して何に
も言はぬ。

『如何もしはしない。』

筑波は味もなく答へて、ちらりと加奈村の顔を見ると其儘、彼の順らしし眼を恥がまし

く伏せておし黙つて了ふ、紺の蚊絆の筒袖に黒唐縮の帯を細い胴に堅く締めて、同じく
箕座の膝も薄く、背を屈めて吸れたやうに「朝日」に親しんで居る風情の、思ひなしか、今
日は又昨日にも増して寝れたやう赤頬の邊、顔の色さへまだらく／＼に白々と褪せて、疎さ
うな其眼遣ひの、宛然疲れ果てた有様は、差し向ふ人の心をさへも沈ませて終ふ程。

『如何もせん？ふむ、然し夫にしちや狼狽へた科ちやつたね、聞けば淺間が君に何か
言つたのださうぢやけれ、一體何を言つたのかい。』

筑波は顔も上げず、

『話らん事さの、心配する程の事ぢやない。』

『心配する程の事ぢやないと言つて、君は彼から酷く元氣が失つて些しも氣が遣入らな
か
つたぢやないか、之は昨夜にも聞きたかつたのぢやけれ、人前でもと思つて黙つて居つた
のぢや、歸りにと思ふたら貴様何時の間にか先へ歸つて了つたさうぢやね。』

『うむ遂失敬した、昨日は一日氣分が悪かつたもんだから、舞臺に出るのも非常の苦痛で
ね』

『然し誠ちゃんの来て居つた頃にはさうでも悪かつたに。』

「うむ、舞臺へ出るに急に……」

「而して今日は何？」

「見る通りなのだ。」

「餘り元氣は無いな。」

「如何も變で仕様がな。」

「醫者には掛つたか。」

「否。」

「夫や不可ん、如何も餘程悪いやうぢやよ。」

「さうでも無い。」

「さうでも無い？ 自分に分るのかい。」

「む！ 大方原因も分つて居るのだ。」

「懣か。」

「馬鹿言へ。」

「胃病か。」

「……………」

「何方ぢや。」

「胃病かも知れぬ。」

「ま、ま、君等の病氣と言ふたら其外にやあるまい。」

「まだあるなア。」

「何病ぢやらう。」

「貧病！」

「アハ、洒落ら臭い病人ぢや如何ぢやい其元氣で今日は充分演らうぢやないか、初日の

呼吸で、なア筑波。」

筑波は夫に答へず、ぐたりと膝に兩手を置いて、呆然空を見詰めた儘フツと長い溜息を

吐く。

加奈村はむづと座り直すと焦かしさうに筑波の肩をハタと打つて、

「堅固せい、何故貴様は左様煮切らん様子をさせるのぢやらう。」

「許して呉れ給へ、僕は病氣なのだ。」

筑波は、く、り、と後を向いて、其處にある机に両腕を突くと、前後から頭を抱へて俯伏して了ふ。

加奈村は幽かに眉を擡めたが、無理に笑つて、

「馬鹿を言へよ、高が胃病ぢやらうが、しかも原因の分つた……」

「さうさやない僕は自白をする、僕は俳優が嫌になつたのだ。」

「？」

筑波は尙後を向いた儘、

「僕は昨夜つく／＼さう思つたのだ、僕等が期うして、ある一つの役を成功させやうと一心になつて居つた處で、其苦心を認めて呉れる人があるものか如何か、恐らくあるまいと思つたのだ。」

「夫で？」

「夫だから僕は俳優なんて詰らん馬鹿々々しい者だと思ひ出したのだ。」

「餘り無造作ぢやね、夫では君等の科を見て泣いたり笑ふたりするのは如何言ふのぢやらう詰り其技倆に感じた證ぢやないのぢやらうか、夫に又世の中には批評家と言ふ者があつ

て我々の苦心を能う見表して筆に残して呉れる事も忘れぢやなるまいか。」

「彼は別だ、批評家と言ふ者は、始めから其苦心を見出さうとして居るので、其技倆に打たれて始めて苦心を見出すのでは無いのだ、其證據には、現在自分が泣いた處を、猶下手だと誇す時があるぢやないか、彼は一種冷血動物なので我々とは領分を異にして居らなくしてはならぬ、無論職業の上だが、然し之も無くてはならぬ事は僕だつて能く知つてゐる、其中にも同情を含んだ劇計には僕等も屢々慰められた、然し僕の望むのは夫以上、あれ丈多い見物の中に、一人でも可いから、無邪氣に僕等の藝を味はつて呉れる人が欲しいのだ。」

「夫や随々あるぢやらう。」

「處が無い。」

「如何して夫が分る。」

「毎日客が違ふぢやないか。」

「當然さ。廿日間も打つ芝居ぢやもの。」

「否、實際に感じた人ならば、廿日間が一月でも見に来なけりやならむ、昨日の客は勿論前の場の技倆をさへ後の場には忘れてるのが多いのだもの、こんな情けない職業かあるだ

らうか。』

『夫は無理ぢや、さう貴様のやうに形に表れたものを求めやうとしてをるのは藝術家の本意に悖つては居りやせんぢやらうか、貴様の筆法で行くと、當込で笑はしても上手と言はにやあるまいか。我々は黄で見せて失敗したりや藍を混せて緑にせうと言ふ様ぢや話にならん、黄は黄の儘に進んで行つて、自然に藍の房にも其色を染み込ませた上、さて藍を混せて緑にせうと、朱を混せて樺にせうとも、夫や其俳優の技倆次第のものぢや、さうぢやあるまいか。』

『けえごも如何したら其證を得られるのだらう、行く水に數かくよりもと言ふ和歌は歌戀の上ばかりでは無いと思ふ、果敢なさは能く我々の身にも似て居るぢやないか。しかも舞臺以外では俳優と言ふ特別な階級に落されて、憤死すべき侮辱にも堪へなければならぬのだもの此上の苦痛はありやすまい。』

『其處ぢや、其苦痛を除く爲に我々は下されたのぢやなかつたらうか、夫は己よりも貴様の方が能く知つてる筈ぢや、忘れたのか筑波、其侮辱も苦痛も、詰りは俳優の品位が低いから起るのぢやらう、即ち淺間輩の如き者があるからなのぢや、然し我々は彼等を退治

しに現はれたのぢやない、導く爲に現はれたのぢやもの、多少の苦痛はある可き覺悟なのぢや。若し人間として同情があつたなら、來る可き時代の俳優に少しも多く安樂を與へ度いと思ふべきぢやらう夫を思ふたら大方の事は堪へて行かにやあらむと思ふ、なア筑波。』
何時か此方に向き代へて居た筑波は、此時不服氣に加奈村の顔を見て、
『殘念だなア僕は、君はもう夫を僕が忘れたと思つてるのか。』
『、忘れんのならば可ぢやないか、餘り弱い事を言ふから如何したのかと思つて言うて見たのぢや。』

『だつて僕は君より外に愚知を言ふ友達は無いのだもの。何も僕は夫が厭だから言うたのぢや無い、只苦しいから苦しいと訴へた計なのだ、夫を何も反對に出て餘計僕を苦しませなくては可いぢやないか、同情を寄せて呉れても可いぢやないか一體君は今日非常に僕を遣り込める。』

『之は酷しい、確かに君は病氣ぢやよ、夫ぢや謝罪するな、己が悪かつた、然し、もう一言聞いて貰はう。可ぢやないか。』

加奈村の聲は如何やら改まる。

筑波、貴様は如何してさう今日は妙に曲れて一人 疳れて居るのぢや、斯う言ふたらば夫も病氣ぢやと言ふかも知れぬが、何か心に無くて、さう人に突掛れるものではない、己も男よ、外へ洩れてあらぬ事なら金輪際口は開かぬ、思ひ餘る事があるのあらば一寸言うて見よ、此世の中は芝居の舞臺とは違つて、獨白とつてからが聞く人はありやせんのかぢやよ。』

『聞かれなくても可いのだ。』

『さう言つては身も蓋も無い話ぢや、貴様も男として顔に見せる位なら言つて見るが可い、又如何しても言はれぬ事ならば顔にも出さんやうにせい、口の方には夫かと思ふ事もあるのぢやけれ、夫を言ひ出すと貴様は絶對的に退くるのぢやからさうでもあるまい、或は國の方に心配な事でもあるのか、まさか貴様もあらうものが、昨日の絶句位の事に頭を悩まして居るのでもあるまい、膝とも談合と言ふぢやないか、如何ぢや筑波。』

加奈村は火の消れた煙草盆の灰を、其處にあつたマッチ殻で丁寧に平し乍ら、ちよいと筑波の顔を盗み見て眞面目さ口調。

筑波は後様に机に背を持たせ無意識に加奈村が抜いて置いた扇を両手で、バラリ、バラリ、開けた。

り閉ぢたりして居た。其親骨の動く度に紅唐紙に箔押し金の金が稻妻のやうにちらちら光る。『夫とも實際病氣らしい心持があるならば醫者に見て貰はにや不可ん、貴様は自分の事ぢやから構はなくても、貴様には可愛い妹もあれば薄命な母……』

『よし〜。』

筑波は俄かに遮つて、

『分つた分つた、僕が悪かつた我儘だつた、許して呉れ給へ、ねね君、心配しないで呉れ給へ、まア今日は悠緩して一處に出かけやうな、今に露も歸る。』

『露ぢやんは？ 學校、さうか。逢つても行き度いが……夫ぢや如何しても言はれんのかぢやね。』

『言ふも言はないも無いのだ、實は自分にも分つてやしないのだ、其中醫者に見て貰ふ事にする、だからもう國の事なんか言ひ出さないやうにして呉れ給へ。』

『さうか？ 可いよ、可いよ、夫ぢや其事は最早言ふまい。就てはぢや、君旅をしたら如何ぢやらう。』

「旅さ、旅行ぢや、どうも除程頭が亂れとるよ、其分で行くと墮落をするか狂人にある、今は迎も駄目ぢやけれ、益興行が濟んだら、何處か近間の海岸へ行つて頭を洗うて來たら可ぢやらう。」

「御親切は有難う、然し……」

「費用の點ならば、座主に頼んで借りて行けば可ぢや。」

「座主に？ 其様事が出來るのか？」

斯う言つた筑波の顔は一方ならず輝いて、見張つた眼にも力が這入る。

「うむ皆遣り居る、まア遣らんの座長とじと君位ぢやね。」

「村尾君なんかも？」

「彼や其方の隊長ぢやわい。」

「さうかなア、些とも知らなかつた。」

「知らない方が可えのぢやけれど、少し位の事で一生の失策を演つたらやならんだから、さう言ふ事にでもして出かけた方が可ぢやらう。」

「さうだなア。」

筑波はちつと考へ込む、加奈村は急に立ち上つて、

「や、失敬しやう、密ぢやんも歸らまい、又後に逢はう。」

「さうかい、餘り急だね。」

「なに、もつと早く歸る積だつたのぢやから。」

「さうかい失敬したなア。」

筑波が名残惜しさに立ち上つた時、階下で婆やに何か言ふ賑やあお露の聲が聞ける。

「や、末來の女優が歸つて來た、なに可いよ、階下で逢ふ。毎度の事だ、送らんでも可ぢや。」

「ぢや失敬。」

やがて階下では加奈村がお露を笑はす香氣がする筑波は暫し聞き惚れて居たが、見る／＼其顔色は沈んで力なく座る。

「僕は性質が違ふのだ。」

其儘仰向けに倒れて足を延ばすと、又しても長い溜息を吐いて両手を枕に唇を噛んで眼を眠る。

「夫では明日彼方へ伺つて見ますが……何卒先生からも何分宜しくお言葉添を……」
斯う言ひ乍ら加奈村の上り口へ下りた若者は、見たやうなと思はれたのも其昔、彼の早
炭座の初日の前日、小僧を連れて筑波の畔をし乍ら彌敷町の方へ曲つて行つた千さんと呼
ばれた頭ばかりハイカラな男。

「夫はもう其添書にも詎く書いてある、又此間逢うた時も夫とあく話して置いたのぢやか
ら。」
送り出した加奈村は引き開けた葦戸に手を掛け乍ら優しく言ふ。千さんは忙たしく一
ツ首を下げて、

「さやうで、否もう飛んだ御無理を願ひまして何とも恐縮でございます。」
「そんな事は可わさ、夫よりも最早斯うあつたら仕方が無いのぢやから、自分も周囲情
を極めて辛抱をしなければ不可ん、外で見る程愉快らしいもので無いと言ふ事は分つたの
ぢやらうね。」

若者は又辭義をして、

「へい夫はもう能く分りましてございます。」

「夫なら可い、又さうぢやらう勘當と承知の上ぢやと言ふ意氣込なんぢやから。」
「恐れ入ります、夫では明日先方へ。」
と片手に持つた小風呂敷の包を一寸戴いて懐へ入れる。

「うむ、朝早く行けば大丈夫居るぢやらう、夜でも最早芝居は休ぢやけね、大方は居るぢ
やらうとは思ふが、又種々用もあらうから。」
「否もう朝で結構でございます、そして何卒盆からでも使つて戴きますやうに。」
「ま、ま、勉強して見るさ。」

「ありがたうございます、夫では又……」

「失敬。」

若者は猶幾度が辭義を重ねて格子を外へ。また暮れ切らぬ夕陽を避けてばつと蝙蝠傘を
開いたが、また一度腰を屈めて足早に通りへ出る、と足を留めて左の手で大切さうに懐中
を押へて微笑、西から東へ蛇のやうに新つた電車の道の、ぎら／＼と日を受けて青く、其

蔓に實つたやうに、此處彼方に工夫が繕ひをする餓頭笠の、五ツ六ツづ、集つて其首を上
下して働く様も、斯う足許からむん／＼と蒸すやうな日には、人の心の情も自ら鈍るこ
見れて、見る人毎に能もあゝ機械のやうに動けるものだと感じさせるばかり、馳て向ふの
角の旗振の旗が急に閃いたと思ふと、其處に立つてた五七人と一緒に若者の姿も何時か消
れて、電線を通るボールの音が耳を打つて暗しく、地響きがして電車が通る。

『お客様はお歸りぢやよ、己は一寸湯に行つて来る。』

玄關から言葉を掛けた儘手拭も持たず加奈村は出て行く。

(二十三)

狭い庭にも置き並べた盆栽に漸く繁き夏も見れて、打ち水涼しく加奈村は元祿浴衣の襟
寛げ、浴みの後を椽端に夕食の體。

『夫程に熱心なのでございますか。』

筋違ひに差し向つて蚊遣火を扇ぎ乍ら、幹めに加奈村の顔を優しく仰いだのは、廿六七、
濃い水髪を見事な丸髷に取り上げた上品な細君で葉子と言ふ。

『うむ、勘當されるのが覺悟ぢやと言ふのだから到底も止められんのぢや。』
と飯を合む。

『まあそんなにも俳優は好いものに見るのでせうか。』

葉子は俯向いて謹ましく微笑む。其白地帷子の衣紋寛く、淺黄縮緬の肌着の襟の見ゆる
のを氣にして左手で合せ乍ら、右手は何時も煩からず四邊の蚊を拂つてる。心持横座りに
した膝の邊程より瘦せて、乳ぶくれのせぬ胸細く、群青へ白く蛇の目を絞つた縮緬に、黒
縞子を合した帯を氣凛と締めて、白絹の引扱で留めたのも、野暮に過ぎず意氣に流れず、
細腰をこつた其足裏の、櫻色した踵から、其指先の玉のやうに美しく小さいのも、卑しか
らぬ生れを見せてる。

遠山暮れて仄々霞んだ、眉は趣深く、一顰滄んだ切長の眼に、情あり、人を引き付
ける力あつて、頬の肉淋しく、抜けるやうな色白、笑へば眞砂眞白の前歯可愛らしく、怒
れば犯し難い威を籠めて、河合の美しさを喜多村の呼吸で行つた風、ちよと寂のある聲で
言葉尻がすばり／＼と能く切れる。

『うむ、さうと見える、ま、然しぢや、筑波程の覺悟を以て此道へ這入つた者さへ、此頃

では彼の様に苦しんで居るのぢやもの、到底も長くはあるまい。」

と加奈村は困つた形。

『夫に富士野さんは随分厳しいさうでございませうからね。』

『うむ、聞いて居られんやうに罵る、——無論藝の上の事ぢやが——然し其處が富士野の深い處よ、さう言ふ具合にしても踏み地へた者を仕立て上げるのぢや、筑波が僅かの間に彼丈の名を得たと言ふのも殆んど富士野の意の儘に動いたからなんぢや。』

『さうでございませうか、けれ共彼の千と言ふ人なんぞは此道へ這入つて如何しやうと言ふ考へなごはないのでございませうから、寧氣樂かも知れませんでね。』

『富士野は又さう言ふのは嫌ひぢやからね。夫にあゝ言ふ様子ぢや身が持ちきれまいて、ま、ま成可く厳しくして思ひ止まらせるやうにし度いもんぢやね。』

『少し罪のやうでございませう事。』

『然し言葉ぢや止まらんから仕様があるまい、僅かばかりの斟酌から何の用にも立たん男を造つちや彼の親身に對しても申譯が無い、夫も筑波のやうに親を離れて了つてる者ならば、又常人の考も違ふぢやらうけれ、彼は幾分か面白半分の氣味もあるやうぢやものな。』

『夫では困りますのね、……最前からい、筑波さんのお話しが出ますけれど、あの藝者とか言ふのは其後も参りますのでせうか。筑波さんも……』

言ひ掛けて葉子は顔を繋めて座り直す、加奈村は眼を付けて、

『痛むのか。』

『否。』

『蒲團を敷いたら可わに。』

『否。』

葉子は淋しく笑ひ乍ら首を振つて、

『暑うございませうもの。』

『暑くても用心に越した事はあるまい。』

加奈村は箸を止めて一心に言ふ。

『ほんごに如何も無いんでございませうよ。少し行儀を悪してましたら麻痺が切れて……』

『うふ、夫なら可わ。』

と又箸を取つて飯を代へる。

『筑波の處でも彼の女には弱つとるぢやらう。』

『夫ではまだ参りますの？』

『否其後二度三度来たさうぢやけれ、何時も婆やに追はれて歸つたとか聞いたが、ま、其の意趣の積りか、近頃方々へ行つて有りもせぬ事を言ひ觸さうぢや。』

『まア何と申しますの？』

『うむ、なんでも彼程堅い人を自分の手に入れたと言ふやうな事ぢやさうか、又夫を得たり畏して煽る奴もあるやうなんぢやね、つい此間も何かの新聞の劇評の序でに、筑波の評の後へ持つて来て此人は大分遊ぶさうぢやが未だ早いおと、書いてあつたとか言つて筑波は酷く萎けて居つた、公平である可き批評に私事を混せる等と言ふのは怪しからん事ぢやよ、悪いと思つたら直接に言つて遣るが可いのぢや。』

『夫が本統の親切でございますね。けれ共何とか夫を防ぐ方法は無いのでせうか。』

『さア方法と言つて……まア筑波が堅固するより外にあるまいが何分年は若し、意志ぢやつて餘り強いかい方ぢやから、之は何時も富士野も言つて案じとる。』

『矢張り迷ひなさいますんですか。』

と氣遣はしげに眉を寄せる。

『さア迷ふと言ふのもあるまいが、如何も不愉快さうな顔をしとる。』

『お氣の毒ですのね、矢張り餘り人氣がお有さるので嫌みもあるんでございませう、あの何は如何致しまして、あの松島とか言ふのは、矢張り杉と仲が悪うございませうか。』

『夫が不思議ぢやね、此頃は全然反對で、折々己の室なんかへも出掛けて來居つて、以前は自分が何か思違ひをしとつたのぢやとか言つて、近頃では頻りに如何言ふ積りかかの字の悪口など言つて、あの女に見込まれると酷い目に逢ふなんて大いに憤慨しとるのさ……尤も此男の言葉を全然信じられませんが、兎に角餘り心掛の善い女ではあるまい、夫に年も筑波より上ぢやらう。』

『年上でも、寫真などで見ますと若うございますのに。』

『うむ、己の始めは多くて廿歳ぢやと思つたりや、廿六ぢやと言ふ事ぢや。』

『まア六？とんと十八九に見えますのにね。』

『化性の者ぢやね……』

『御飯?』

手早く葉子は朱塗の盆を出す。

『否もう止す、長く食うた。』

加奈村は両手に腹を摩つて茶を呼ぶ。葉子は片脇の番茶の土瓶を向ふへ押し遣つて膳を引寄せ、

『年上ぢや尙嫌でございますねえ。』

『うむ夫に夫を嫌ふに就ては藝者ぢやからと云ふ事以上に向かあるやうなんぢや。』

『ぞんぢ事か?』

『確と分らんから言はれんけれ共、如何も餘程心を悩ましてるものがあるやうぢやね。』

葉子は膳を次の間へ押し遣つて下女に下げさせ、新らしく又茶を呼んで茶香に湯ぎ乍ら心を悩すつて如何言ふ?』

『如何言ふと云うて困るな、ま、ま、何かあるらしいのぢや。』

『何かつて、あなた、分りません、御婦人ですか。』

『まアさうなんぢや。』

『へ、素人でございますか、そして向ふでも知つてるのでせうか。』

『さう強みかけても不可んよ、素人は素人ぢやけれ、夫と明した譯でもなし能くは分らんのぢや、まア夫かと思ふ計りよ。』

『夫ぢや能く聞いて總めて上げたら好いぢやございせんか。』

『然し俳優と言ふたら婦人の家で承知すまい、夫に筑波は彼で酷く臆病ぢやからなかく言はむ言はむものを當推量に遣る譯にも不可ん。夫にまだ國の方にも何かあるやうぢや。』

『矢張り御婦人?』

『アハ、さう女賣ぢや堪らん、然し女は女よ、母親ぢや。』

『御母上が何うぞなさいまして?』

葉子は蚊遣に新らしく杉の葉を加へて、

『なに、何うかしたのは母親ぢや無いが、何せい、何も彼も一時に突貫して來たのぢやから身體も弱るよ。』

『お加減も悪いのですか。』

『今も言ふ通り、前後から責められざるのぢやからね、夫に國の方は露らやんを養つ

とる以上には盡せまいから何か知らんが辛いぢやらう。』

加奈村は縁へ掛けて足許を扇ぐ、葉子も僅かに居座り出て、漸く暮れ初める空を仰いだ
が、直ぐ又蚊遣を氣にし乍ら、

『一體筑波さんのお國には何方と何方がお出でになるのでせう。御母上と？』

『繼父と露ちやんの直ぐの姉と、今の父との中に出来た小さい弟と四人ぢやね。』

『まアそんなに入らつしやるのですか、けれ共その方々を過して入らつしやる譯ぢやござ
います。』

『うむ夫や無からう、其地方でも聞けた資産家ださうぢやものな、彼の男も今の父が二度
目の養子に來ぬ先には油畫の修業に出て來てたんぢやさうな、然し其留守に今の父が來た
と云ふ事もあるし、實子も出來た事なんぢやから、ま、ま種々家を離れたに就いても俳優
になつたのに就いても面白い經歷があるのぢやらう。母親も其爲には苦勞しとるし、長妹
も國では下女代りにされてるさうぢやから、引き取り度いとは言つとるけれ、ごとも今の
身の上ぢや出來まい、其うあつて來ると金が怨みの世の中ぢやよ。』

加奈村は足を上げて、兩膝を抱へて其上へ頭を戴せ、向ふの隅からのそりくくと出て來

た裏を見て居る。

『夫ぢや順當に行けば、立派な資産家の若旦那で暮されるのでございますね。』

『うむ、些と誰かに似て居る、うふ。』

『ほゝ。ですけれ共どうせ獨立遊ばすなら其畫の方でなされば好うございましたのに。』

『何故。』

『でも畫家の方が俳優より格が上かと思はれますもの。』

『た前がさう思ふのか。』

『否、私はさう思ひません、けれ共。』

『そんなら可ぢやないか。』

『はい……………』

と葉子は順しく口を黙んで俯向て終ふ。

加奈村は振り返つてちつと見て居たが、

『たい、如何した、俳優の御君は厭になつたのか。』

葉子は忙て、顔を上げ、

「あら、さやうぢやございませぬけれ共、私共の肩身の狭いに就て筑波さんも時々はお思ひ出しになるだらうと存じたのです、けれども、同情は同情、覺悟は覺悟、なので、私は何も自分が不足で申したのぢやございませぬからた氣にお掛になつちや困ります。』
葉子は事もなげに言放つて優しく笑ふ。

「夫や有難い、然しもうそんな話はずさう、何か果實は無いか。』
と上へ上つて、

「糸、燈を持つて来い。奥さん何かありますか。』

と後向きになつて座つた儘遠くへ手を延ばして葉子の手許を覗き込む。葉子は漸く葉細具の籠を取つて前へ置く處へ燈が来る、蓋を開ければ皿のやうな色をした水蜜桃が十あまり。

「ほう見事ぢやね。如何したんぢや。』

葉子は恐れるやうに加奈村を見乍ら、

「今日た留守にた邸の姫様が見えまして……………」

「姫様、何の？」

「た嫁きになりました、御大きい……………」

加奈村は急に不快な顔をする。

此時つと寄せた風に、蚊遣の煙細く靡いて、幽かに羽根を鳴して驚かす蚊の聲。何處やらに風鈴の音がして、川岸あたり幼く呼び交す子供の聲に混つて、南京花火が頻りに上る。

「又何か言ひに来たのか。』

「否、今日は大變に御機嫌でございましてね、た晝少し前に入らしたのです、而して今日は稽古かいつて御仰いますから、はいつて申し上げると、夫ちや一日留守なんだねつて御言ひにありませんから、否稽古は晝迄に済みます筈で宅にも來客がある約束でございませぬから遅くも二時迄には歸りませうと言ひますと、客は何だなんだなんぞお聞になつて夫から此品を糸に購して少し上ると直ぐお立になりましたね、其中一日留守の時に報して呉れ、お前に頼み度い事があるつて御仰いましてね、早々にお歸りになりました。何でも大變思込んだ事でもたありになるやうでございましてよ。』
加奈村は始終不快さうに聞いて居たが吐息を吐いて、

『困つたもんぢやね、又病氣が起つたのぢやらう。』

『何か御座いましたですか。』

『如何か知らんがね、何か無くて己の留守を覗ふ譯もあるまい、餘り身を入れちや不可んお前は元來人が好過ぎるよ。』

『でもあゝやつて心にも無い處へ御縁付になつて入らつしやいますんですから、大抵な事なら承いて上げ度いご存じまして。』

『夫が不可んのぢや、承いてかう出来る事なら好い、若し出来ん事ぢやつたら如何するか。』

『けれ共、あの方も最う昔のやうな事もございませうから。』

『お前は何も知らんからそんな事を言ふごとのぢやけれ、お前は彼の人に如何言ふ目に逢うごと思ふ。』

『……………』

『夫もお前に無理があるのなら仕方もあるまいが、さうでも無いのにあれ程の目に逢ひ、其上己が彼丈論してもまだ分らんやうな人ぢや、そんな人に何も盡す所以はないのぢや。』

以來逢はんやうにするが可い。』

『はい……………けれ共主人は主人でございませうし、お可哀いさうで。』

『何が可哀さうなんぢや、我儘も我儘も彼の人の罪の深い我儘なんぢや。お前に頼みご言ふのも大方己には分つごる、お前も身に受けた災難は絶念めるとしても他人にまで夫を及ばさうとは思ふまい。』

『夫はもう……………。』

『夫なら可い、ま、ま、今度來ても成丈遠ざけごくやうにせんご不可んよ。』

『はい。』

之を聞くと加奈村は直ぐ立ち上つて、

『一寸筑波の處へ行つて來る。』

『今から？』

『うむ、金の興行が済むと旅をすると言つて居つたけれ、如何するか、するならするやうに今から其心組も要るぢやらうから……………。』

『さうでございませうね……………何しろお休が短かいから忙しなうございませうね。』

「最早明後日が初日ぢやもの。」

「もうでござらしますね。」

『その積で一寸出て来る。』

『は。』

と立ち掛けたが、

『あ、筑波さんは學校ぢやございせんか。』

『否近頃休んでると言ふ話ぢや。』

『夫では……た召は？』

『帷子。』

と加奈村は椽へ出る。

『只今。』

言ひ乍ら一寸壁に手を衝くと加奈村の方を盗み見たが、其儘身輕に立ち上る。こは柳の折か、細腰すらりと思ひの外、葉子は哀れ跛へであつた。

(二十四)

一颯り川面を名残惜しさに流れて居た夕日も、毒々しいやうな雲の峰に吞まれて、濱町の河岸に泳ぐ子の顔も腫に暮れ行けば「蛙が鳴くから歸アへる。」と疝高な聲か辻辻に反響のやうに傳はつて、門並の瓦斯に火も這入る、豆腐屋の喇叭も消れて了ふ。

今行き違つた電車の後を、大急ぎに走らぬけて唯ある電柱の下に立つたのは、糊の強い白地の筒袖に淺黄の帯を締めた、九ツばかりの男の子で、黒光りに日に焼けた丸顔が片燈で氣味の悪いやう。一寸四邊を見廻したが何處にも友人らしい影はなく、自分を呼ぶ聲もせぬので、不平らしく頬を膨らした途端、破裂でもしたやうに眼がばつと光るくなつて、

「萬歳！」と言ふ聲が俄かに起る。仰天して振り歸ると、直ぐ側の眞暗な路次の中に大勢眞黒な坊主頭が寄つて電氣火花を上げてる。忽ち淺黄の帯が空に懸へつて其中へ飛び込むと思ふと、火花は消えて又眞の暗となる。空にも星無く如何やら雪も厚さうで、酷く蒸し暑。

「萬歳！」

又ばつと明るくなつた中で赤い顔やら黒い頭やらが多數溢く。

『何だい、何するんだい私が貰った花火ぢやないか、ね坊ちゃん。』
はつきりした聲で言ふ者があると、

『貰ったと思つてお世辭用やアがる、已に呉れろい。』
すると以前のとは違つた聲で、

『た止しよ金ちやん、ね前は後から来たんだから別にね貰ひよ、ね坊ちゃん。遣るでせう。』

今度は順しい聲で、

『遣つても可いけれど、喧嘩するなら嫌だ。』

『遣るつてさ金ちやんお貰ひよ、而して皆で揚げやうや其方が景氣が可いせ。坊ちゃんが大将で。』

『嫌だ嫌な事だい、喧嘩の嫌いな大将なんで駄目の糞だ、駄目大将の糞大将、花火がな
くても喧嘩は出来ますよ、へい、さやうならだ、玉公明日學校で苛めて遣るから覺わてる
やい駄目大将の糞大将。覺わてる。』

淺黄の帯の金ちやんは悪體もく體言ひ盡して、路次の外へ走け出したが、直ぐ走け戻つ

て、

『おい〜皆、向ふからな、早座の加奈村さんが来るせ、屹度此處を通ら、だから皆で
花火上げて驚かして遣らないか、而して勸業場か何處かへ連れてつて貰はないか。』

今泣いた鳥のもうけろりとして一生懸命。

『今夜は能く役者が通るなア。』

『あ、筑波さんも最前通つたね。』

『其時も花火上げたんだせ、金ちやん。』

『そして筑波君萬歳つてつたんだ。』

『随分驚いてたねわ。』

『顔が眞青だつたよ。』

『暫く立つてたねわ。』

『夫から玉公が筑波さんの假辭遣やアがたら又驚いてたせ。』

『顔が眞青だつたよ。』

『そんなに幾度も驚くならない。』

『始めつから青いんだい。』

『終ひにや赤くなりなりましたからね。』

『お生憎様、黒くなつたんです。』

此中又金ちゃんも走け出したが、直ぐ又引返して、

『たい喧嘩は後にしろよ、もう其處迄来たよ。』

『ぢや揚げやう、一時が可いせ、さア金ちゃん、お前にも遣らア。』

『有難う、坊ちゃん有難うよ、線香はあるかい。』

『あるよ、さア。』

『待つといでよ、も一遍見て来る。』

『金ちゃんも往つたり來たり燕のやう。』

『可いかい。』

『可うし。』

手早く南京火花を並べて子供は暗の中に一齊に躊躇むと、小さい線香の火が山形に長く赤い糸を引く。

『君仰天したかい。』

加奈村の眞向ひから右の手に火の付いた電氣火花を持つた儘取り付いてるのは坊ちゃんも立てられてる子で色は他の子供よりずっと白いけれ共、肉付の可い丸々と太つた十歳ばかり、紺と白の思ひ切つて太い縞の筒袖に太い紫色の緞の帯を胸高に締めてる。

『否。』

と加奈村は笑ひ乍ら簡単に答へて、火花の光に四邊を見廻す。

『大勢居ますね。』

『あゝ九人なんだ。』

と答へた子がある、何れも始めの勢には似ず遠巻に呆然見て居る。

『やア火花が消ゆる。』

と又誰か言ふ。

『通りへ出さいか、暗いから。』

『顔が見え無いや。』

と變つた聲で言ふ。

『私にも顔が見らん、通りへ出ませう皆様。』

と云ふと一度に加奈村の身體を左右から押し始める。
『危い、危い、轉んで終ふわい。』

踏眼と通りへ出ると、坊ちゃんの外は皆又立ち離れた。
『サア見ゆるぞ。火花を上げたのは皆かな。』

『あー！』

と一齊に答へる。

『萬歳と言うたのは？』

『皆。』

『いや有難う、皆様は加奈村が最負ですか。』

『あー！』

断く囁々して、

『筑波さん、可いぞ。』

と云ふ子がある。

『私は加奈村さんだ。』

と金ちやんが後の方で小さく言ふ。坊ちゃんは自慢さうに、

『あの筑波さんも最前此處を通りましたよ。』

『筑波は何方の方へ行きました？』

異ふ子の聲で、

『あ、すつと自分家の方から河岸の方へ行つたよ。』

『河岸の方へ？』

『あ、其時も火花揚げたけど、だまつたよ。』

『仰天したんだい。』

『青い顔してたよ。』

『あ、い、い、いで走って行きましたか。』

『中位だなア。』

『ふ、中位、夫ぢや己も行つて見にやならん、河岸の方ぢやね。』

『あゝ、も少し最前だ。』

『有難う、夫ぢや又遊ぶ事にせう、家の方へも来給へ。』

と加奈村はもう歩き出し乍ら

『あゝ、樂隊し乍ら行かア。』

『うむ……』

と答へた聲は聞えず、後では又ニツ三ツ花火が揚つたかと思ふと、

『加奈村さアん。』

と疾走つた女の子の聲が後に聞えて、忙たしく追ひ纏る男の足音、何かは知らずはつ

として振り返る後で、

『先生。』

とた露を背負つた長太郎が、息を切らして立ち止る。

『わゝ如何したのかい、露ぢやん如何しました。』

『先生。只今た宅へ上る處でした、家の先生が……』

『居ないと言ふんぢやらう。今己も探しに行く處なんぢや。』

『否家の先生はわざと散歩に出られたので、家に困つた客が来ましたので。』

『さうか！夫ぢや分つた、己が行く、筑波は大丈夫ぢやね。』

『はい。』

『夫ぢや行かう、露ぢやん堅固摺まつてるんですよ。又走りますからね。』

二人は間もなく花火隊の脇を走けぬけて引かへす。子供達はあつげに取られて、

『如何したんだろ。』

『皆今夜の役者の顔は青いね。』

『恰で電氣花火のやうだ。』

『アハハハハハ。』

と一「と」最早其事は忘れて、後は又「萬歳」「萬歳」の聲賑はしく。

(二十五)

葦籬を潜る風涼しく、河岸の花火も物遠に、やゝ宵深く蚊遣の香にも馴る程、筑波が家の其書齋に、加奈村は威丈高に構へた肩をぐんにやりと落して、苦々しげに差し向つた

人の顔をちらと見て大息を吐く。

向ふ前にちよと打背いた綿明石。段暈しの薄藍の紋縮を下に着て、焦茶地百合の縹模様の單帶。こちらから前髪を出した髪りエス巻を、三分ばかりの珊瑚球を七ツ寄せた風車の簪にひつたりと留め、銀糸すが縫の楓二葉三葉、その勝色地の半襟に包んだ領もとの美しい、けんのある眉根を深く寄せて稟とした眼指、一文字の口、男々しき頬の骨からすむつくりとして、艶麗はしき肥肉の廿七八は、これぞ葉子が噂の姫様で彼の笹川夫人。『貴女の方でさうな分りにならずば私も最う何にも申しすまい。然しちや、奥様。私は今年の暮に二度目の洋行からお歸りなさる御兄様に何と貴女の御話を致したら可わでせうか。御出發の時ちやつた、そつと私をお邸へお呼び下さつて、内々の者には逆も眼は屈くまい、お前は幸あ、言ふ社會に這入つてゐる事ちやから、もし妹の噂を聞くやうな事かあつたらば、遠慮なく責めて呉れ、そして私が歸るまでに何卒妹が昔のやうに優しくなるやうに頼む、ね前には葉子と言ふ大切な人をあんな不具にして恨もあらう、然し夫も考へて見れば皆……さう言はれたのです……夫は私も貴女のお心を知らぬのではない、能く知つてゐる丈に貴女の無情な行爲を恨みもしました。高等な教育もた受けになり、彼程利口だ

つた貴女が、無分別な戀の恨に罪もない者をあんな哀れな身になすつたのも皆私故ぢやありますけれ、夫ならば夫で葉子は何處迄も貴女に恨まれやう、貴女の爲には盡さうと言つて居るのぢやありませんか。然るに貴女は如何ですか、身は立派に他家の夫人であり乍ら、我儘な嫉妬から、うら若い女の身を傷けておほ飽足らず、お兄様や私の眼を忍んで所有る不品行、貴女は詰り而して私を困らせやうとなすつても、貴女の御兄様はさうは貴女ばかりを信じては居られませんぞ、私も今迄は堪へましたけれ、之からは一々御兄様の許へ通信します。』

加奈村は何の爲にか帯から脱して我が前へ置いた例の時計を取て又帯に包みながら、『貴人は最早昔程此時計を見ても心はお動きになりすまい。私は今に此時計を見れば御兄様の彼の厳格なお顔が鮮明と見えます。私は貴女に向つて御異見致すのは之で僅に二度ですよ、けれども前の時には貴女は聲を放つて御泣きになりました。さうでせう、覺はがおありでせう?』
加奈村がちつと見る顔をいよ／＼背向けた夫人の眼には何としてか人知らぬ潤みをもつて、口唇へ幽かに震へてるけれ共、氣強くも首は垂れず、膝に置いた手もびくともさせ

ぬ。

『お覺わがある筈じやー然るに今日の貴女は口惜しいと思ふ顔もせられぬ。夫はどに貴女の心は腐つて了はれたのか、しかも始めて私が御異見申した頃は、ほんの芝居道楽、ともすれば厭な噂が耳に這入つた位に過ぎなかつたのに、今は如何ですか、劇界に於て貴女の名を知らぬものはありますまい、況や之から世に出て大いに事をなさうとする新進の輩まで憚さうとは……實に貴女は劇道の微菌じや。馬鹿な、筑波が貴女如きに從ふか從はぬか私が付いそります、出直してお出でなさい……うむー私も之から筑波を探しに行かにやなりません、今日はお歸り下すつて、能く考へて又お出でなさるとも或は分別をお變へなさるともじや。サア私も出掛けます。』

加奈村は追立尻のさし寄つて促せば、夫人は背向けた顔を靜かに歸して、仄かに笑つたかと思へば、聲も震へず、

『花香さん、筑波も筑波だけれど、貴女も大變な思ひ遣ひをする人ですわね。』
加奈村はちろりと夫人の顔を見上げて、斯様まで情なく變り果てた其人の昔を思ひ浮めて言ひしれの口惜しさに胸も迫る計り。

夫人は尙微笑かに言葉を續けて、

『ねら花香さん。何だか貴女のお言ひさるやうだと、私は何か厭らしい野心でもあつて筑波に逢ひたがつてるやうに聞けるけれど、私はまだ夫ほど墮落してやしませんよ。今迄に随分煩さい噂もみんな、中に立つて作へるものがあるので、大方は根無草なのです。私が好み心からお葉さんをつひ彼んな不具にしてつたのは何とも貴女には申し譯が無いけれど、若しお葉さんが私の身だつたら彼の人だつて演りかねやしまいと思ふね。貴君達が若し恨みたくば私のお父様を恨んで貰ひ度い、だつて考へて御覽。何にも知らない娘を追ひ立てるやうに嫁づけて了つて、さアちやんと分別が付く時分になつて彼の人こそは染々思ふ時には自分はどう取り返しのつかぬ他家の者にあつてるのだもの、女と生れて、之が口惜しくなくて何が口惜しいか、貴君などには分りやしまい、夢中にもならうぢやないか、彼の女が憎らしくもならうぢやないか。』

ねら華香さん、知つてお出でせう。』
夫人は他事のやうに流みもさく語つて戯れらしく加奈村の顔を覗き込む。加奈村は素氣

もなく、

『貴女がお忘れなさらん事を如何して私か〇れませうかい。』
『さう覺つて、さう。』

と夫人は嬉しげに、

『でもね、私の事などは滅多に覺つて、呉れない人には、不思議ね、矢張りお葉さんに係つた事だからだらうね。』

『そんな事は可いからお話しを早くなす。』

『まア、ほんごに邪慳！花香さん。』

『……………』

『花香さん怒つたの？』

『お話しが長いやうならば今夜は御免蒙ります。』

『否、話す、話すければとも貴君のやうにさう急ぎ立てられや、おどくして言へなくなつて了ふぢやないか。』

『可成からお話しなす。』

お、恐い事、餘り怒られたので話の口を忘れて了つた、……………あ、然う！さア勝氣の私は人に手を突いて謝まるやうな事をする、お父様には出入を止められる、一生の良人とする人ば煩さく付き纏ふ、自分の思ふ人はもう指もさせなくなる。私の心も狂ふだらうぢやないか。さア此苦しみを何處へ行つて洩さう、誰に話して同情つて貰はうと思ひ出したのも無理はあるまい、ねね花香さん。』

『夫が筑波に如何云ふ關係がありますか。』

『あら、筑波と之とは話が別ぢやないか。』

『別な話などは聞いて居られんのです。』

『まア氣の早い、夫を一通り言はなけりや分りやしない。まアさう言ふ譯で、男なら悲者と言ふものもあらうけれど、女はさうは行かない。して見れば自然貴君と言ふ縁もありますから、此方の方へ氣の向くのも尤ぢやないか。夫も始めの中は新俳優などは振り向きもしなかつた、處が、段々其方へも馴れて見れば一時は種々恨みもした貴君の事も思ひ出されて……………そんな恐い顔をするもんぢやない……………夫でね花香さん、貴君の事には逆も手は出させまいから、せめては大變中の好いと言ふ噂の筑波が、此頃如何言ふ譯か座長からお

金を借りて……………」

「馬鹿な事を御仰い、筑波が何の必要があつて……………」

「否、嘘ぢやない、だから座主はその爲次狂言の給金から夫を差引くと言ふので、筑波は他の座へ移ると言ふ噂まであるのぢやないか、夫だから私はさうなつては彼の人の爲にも悪し、又貴君だつてどんなに情けなく思ふだらう、さう云ふ事なら無いものではなし、お金で済む事なら如何かして助けて遣り度いと思つて……………」否ほんですよ其様な欺はしさうな眼をするもんぢやない、嘘だと思ふならば探つて御覽なさい、夫も之れも皆貴君好かれと……………」

「あゝ分りました、然しぢや、貴女は貴女で人の妻として、夫ならば夫で何故私へなり、葉へあり、公けに相談をして下さるのですか、人に隠れてなさればこそ欺ひの種も蒔かれるのです、以後私に隠れて何事もあさる事はなりません。好いですか。」

「あゝ夫ぢや貴君に話せば筑波も誤解せずに逢つて呉れませうね。」

「夫は追つて申し上げます、ま、今日はお歸り下さい、僕も急ぎますから行きます。今車を言ひつけます。」

「けれども、夫ぢや筑波の方は。」

「私も貴君の言葉ばかりでは信じられません、今日は兎に角お歸り……………」杉君お客様の手を言うて下さい、私はお先へ。」

(二十六)

筑波は不圖歩みを止めた。まだ家を出て幾らも来はせぬと思ふのに、肩は張り足は倦く頭はぼろぼろとして身體は勞れ、手首から胸の邊を氣味の悪い程びたたくと汗ばんで、冷たい風が當る度に悚々とする其心持の悪さ、ぐたぐたと其儘座つて了みたやう。

此宵も何と言ふ事なし、呆然と考へてた處へ慌たしい杉の取次は想ひも掛けぬ笹川夫人の訪問と言ふ……………」其儘一も二もなく物十へ抜けて其處から危い家根傳ひ、やうく路次へ下りて盲目探りに水口の下駄を穿いてる處へ又杉が来て、夫人は二階へ通つたこの事、夫では已は其邊を歩いて来る、斷つても歸らずば加奈村を頼みに行つて歸るやうにして貰へと言ひ置いて出た……………」

夫から物の一二時間も経たうか、幾座廻つて家の二階を見ても女の影は消わやらず、露

子の聲も聞かぬのは最早寢たのであらうと思つた。

新道で子供連の花火に驚かされた……何れも今宵の出来事とは思ふもの、ちつと考へて
ると、遠い昔の事のやうにも思はれて、ちつとも鮮明せぬと言ふのは如何したのであらう
一體自分は此頃餘程如何かしてゐるに違ひない、學校は斷然休んで了つて居るし、稽古には
氣が遣入らず、さうかと言つて書を勉強する譯でもなければ、本を讀むでもなし、朝起き
るから夜寝る迄毎日、呆然と暮して、夢と言へば何時の晩も何者にか責められて、苦し
さに幾度夜中に眼を覺すか知ればせぬ、其辭缺かさす夢に見る人は彼の菊代と言ふ娘、自
分はあの人を思ひ出す時は心持の悪い事はない。夫だのに思ひ出すに居られぬと言ふ
のは正しく、彼の女は悪魔、魔者さんだ。加奈村が何と言はうと、自分は彼の女を何とも
思つては居ない、思つて居る處が憎くて仕様がなないので、縦へば憎くないにもせよ、夫
が如何なるのだ、先は素人の立派な生娘ぢやないか、幾ら此方が死ぬ望思つた處が向ふで
は素人の娘が俳優に思はれやうとは、夫から考へもしまい、又さう思つた處で此方は階級
の違つた俳優なのだ——世の中に新平民を憐れだと言ふ者はあるけれ共、同じ階級の悲し
みでも俳優を哀れむ人は先づはあるまい。あ、何と言ふ情けない事だらう新平民に生れた

ものは其生れからして階級が違つてゐるのだから又絶念められぬ事もなからう。けれ共俳優
は如何だ、而かも自分も世に言ふ河原乞食の末でもない身の上には、如何しても絶念め
る事は出来ない、今迄にも俳優として素人の娘に戀した者は、みんな「峻かした」と言ふ悪
名の許に相手の女の名譽まで傷つけてゐるではないか、然し夫も俳優其者の祖先の罪が報つ
てるのだと思へば仕方が無い。けれ共、如何したら其罪を償ふ事が出来るのだらう、此際
い世の中で……實に情けない自分は菊代に戀しては居ない、居ないけれ共加奈村はさう見
てるのだ、戀はせず、只さう見てゐる丈でさへ、自分はこんなに苦しいのだ、之がもし戀
してたのなら、どんなに情ないだらう、悲しいだらう。夫は菊代と言ふ人は自分を何と
思つてるかもしれない、然れ共縦へ兩方で如何思つた處で、二人の間には夫れ種々
障害物を控へた廣い原があつて、なか／＼延び上つて手を延ばした位では届くものではな
いのだ、まして双方から寄らうとでもしやうものならば、忽ち何方か其障害物の爲に倒
されて了はなければならぬのだ。止むなく何方かの一人が此障害物を避けて其原を越えて
首尾よく手を取り合つたとする、然し其時には、二人とも其廣い原を遠く離れて居るに違
ひない、原は何だ、我々が社會！其社會を離れた自分は何の價値も生命もない。菊代さん

だつて恐らく然うなつたら何の爲に苦しんだのか分らなくあつて了ふだらう、あゝ二人
逆も近よれるものではないのだ……

筑波は唯ある橋の袂に身を寄せて、思ひ悩みつゝ右手を上げて其頭に觸るれば「新緑」
を打揚げて以來、又延びるに任せた髪の毛は如何したのが、つしより、驚いて振り仰ぐ、
中空に聲あり、はらゝと其蒼ざめた頬の薄鬚にさへ雫して、此頃は日和癖の、又しても
降り出した夏雨の銀糸亂るゝ夜の街。

途端にからゝと辰巳へ向けて通る車の提灯、夢の様に見送つて筑波は静かに橋を離れ
ると、傘もなき雨を恐れもせずぶらぶらと又歩き出す、處も思はず方角も知らず、心地あ
しく手首に纏む白緋の筒袖を、振み上げ振み上げ乍ら足を運ばば、裾は又脛に巻きついて
自由にあらぬを、流石に端折りもならず折々上へ繰り上げては低い書生下駄の、びしよ
ゝと意氣地もなく歩く。一町ばかり、來たと思ふと、厭に青い光を三階かけて輝やかに
た家の前へ出たので、つと避けて右へ折ると又橋がある、無意識に夫を渡りがけ乍ら右を
見れば、川幅廣く油のやうに光つた水の大半を隠して、苦を下した船が風待をしてるのか
ぎつしり數へきれぬ程岸に添つて眠つてるのが、うす白く見えて、開き澄すと、えー光一

と寝ぼれ聲に語つてるやうなのは暑さを詫びてるのであらう——遠く汽笛の聲が尻切に聞
れる。

何時か其處も過ぎて、片側は大きな建物の鬼の眠つたやうに殿かに高い前側は、此町は
かり言ひ合したやうに薄ぼんやりとして燈を灯けて、表口を開け離れた平家造りの、何れ
も店に長火鉢を置いて、恐しく派手な裕衣を着て白粉を削げるやうに塗けた女が、二三人
づゝ酸漿を鳴らし連れて、門に立つてるもの、店に腰かけた者、何れも表を通る人毎に眼
を注いで聴で話してる、

『ちよいと傘のない旦那。』

其聲も遠く空へ消れて行くやうに聞き流して又暗い町に入る……何處かで赤子の泣聲
がする——筑波ははつとしたやうに首を上げたが、あゝ自分は國に居るのでは無いと思つ
て、其聲を忘れやうとする、如何したのか、何かしら今迄歩きながら考へた事も、ねこ
そぎ忘れて了つて、其聲ばかりが頭の内側に噛み付いたやうに染み込んで離れない、忙て
ゝ両手で耳を閉ぐと尙更深々こと叫ぶやうなので今度は急いで眼を閉ぢれば今迄四邊の騒
氣な町の景色に遮られた頭は俄かに鮮明と、一人の三ツばかりの男の子を抱いた、美しい

四十ばかりの氣凛々とはして居るが、肩の邊見違ふばかり瘦せ果てた、丸齒の女の顔を描き出す。

「勇や。お孝が可哀さうに……」

其女は筑波の實名を呼んで悲しげに囁いたかと思ふと、忽ち其姿は消れて後には色の黒い廿歳ばかりの娘が、節くれだつた両手に顔を被つて泣いてるのが見える、思はしいと思つて眼を開く前に雲突くばかりの大男、眼の丸い、頬から腮へかけて眞黒な鬚とてつものい、大綱の袴衣を着てのその、一眼見ると、筑波は我を忘れてぶる〜と身震ひしたかと思へば突然、

「網造！」

と叫んで立ち止る、聞けたか聞けぬか、大男は一寸見返つた儘、二三間行き過ぎると氣もない聲で、

「エー之は御評判の道樂世界……」

蹣跚として筑波は、化されたやうに力抜けした眼を見張つて、其男の後姿を見送る、萎れた浴衣の襟首に差した丸い提灯が、其領許を赤く照らして、ふと今しも思ひ浮んだ人

とは似ても似つかぬ風俗。ほつと息を吐くと、俄かに恐ろしい此場を遊れ度さうに、しやにむに足許も見す息を切らして歩き出す途端、

「アラヨ。」

と耳許に御影石をこする俵の轍。

「御機嫌宜しう。」

と仇な聲が、

「危い！」

と言ふ尖り聲に消されて筑波は頭がかつこしたと思へば俄かに人聲喧しく、

「不可ねね、不可ねね、水々や、筑波だ、女將、筑波だ、しかも全端で如何したんだ筑波

オイ筑波。」

「筑波さん。」

其聲遙げく、自分は雲の上を歩む心地、淺黄の戸張高く掲げて、匂やかにさし招くは戀せぬ菊代！

「筑波さん。」

其聲、雲を隔て、いゝと、いゝと、遠く。

(二十七)

『分つてるのなら、何とか一ツお話を付けて戴き度いもんですね。』

と云つて、半麻の紛帳に手を拭き、這入つて来た、眼差の強い、いやに丈の高い五十ばかりの男を見上げ乍ら斯う言つたのは座長の富士野で、思ひ切つて大きな井の宇絰の浴衣に紺絞りの兵児帯を前結びに締めて、近頃めつきり肥つた身体を、きこちなさうに椽の柱へ寄せ、投げだした兩足の兩膝を抱へて頭を後に摺りつけながら向ふの顔を見い見い

『へ、夫りア座長の御手紙の趣は能く分りましたんですがね……』

と相手は煮ねきらぬ返事の仕方、洋服の膝を惜しうに撮み上げ乍ら座る。

『何卒お平らに、ね、構ひません、私なんか斯う言ふ行儀なんだ、ほんとに澁谷さん座つちや洋服が堪りません、貴君は好くても洋服屋が泣きまゝ、いやに強情だね、アハハ、遂々負ましたねアハ、』

と、其癖の口尻を曲げて面白さうに笑ふ、澁谷も苦笑ひして

『どうも座長に逢つちや敵ひませんよ、夫では御免蒙りまして。』
流石嬉しさうに座り直すのを、

『アハ、遂々負けましたね、アハ、』

と富士野は尙腹を練る。

『座長御病人。』

心附けられて、

『うむ、さう、如何です、氷はまだあるかい。』

と延び上つて聞く。吹き通して次の六疊の間に、麻の小蒲團薄く被いて一文字に綱帯し頭を仰向けて寝て居るのは筑波で、新しい天井から二枚糸を下げて釣つた氷袋を額に載せ苦しげに眼を閉つて居たが、

『否、まだ有ります。』

『本統かい君、遠慮しちや不可ないよ遠慮しちや、い、かい、淋しけれや露ちやんでも杉でも呼ぶよ、露ちやんを呼ばうか。』

「否、反つて心配しますから。」

「さうかい、さうかも知れないね、夫ぢや呼ぶのは止さ、然し遠慮しちや不可ないよ、尤もさう心配する程の怪我ぢやないんだ、けれど又斯う寝てる處なぞを見れば兄妹の情で兩方に悪いかも知れない、夫では止さう、君も家の事は案じずに早く治つて呉れ給へ。」

「有難う！」

筑波は其儘又眼を閉る。富士野は其顔を覗いて暫く考へ、澁谷の顔を見返つて、

「此處で話したら喧ましいだらう、座敷を變へやうかな。」

獨言つやうに言つたのを、筑波は直ぐ聞きつけて、

「座長。」

「何？」

「何卒話は其處で願ひます、僕は獨りぢや淋しいですから。」

「さうかい、然し話が巧く纏れば聞いて、も可いがね、若し纏らなかつた日には妙ぢやないか。」

「否可いですよ、僕は構ひません、大太元のお心さへ此方に呑み込めたら不承は言やせん

ですから何卒宜しく願ひます。」

「うむ、夫や遣る處までは遣るかね、勢ひ御話が聞き苦しくならぬとも限らないからね、君の病氣に障ると悪いから。」

「障りやませんしよ、若しも他室でなさると僕は餘計氣にあつて心が休まりません、勝手

のやうですが此處で願ひます。」

「勝手も何もありません、私だつて此處の方が君の様子も見乍ら出来るし、川は眺められるし、風は吹き通すし。」

「ですから此處で願ひます。」

「夫ぢや此處でするとして、まア成丈は耳を閉いで居給へ、では澁谷さん御意見を伺ひませう。如何言ふのです。」

「意見と言つて……夫や座長の御話は分つてるんですが。」

「物靜かに貰を取り出すのを、富士野は苛つたそうに眉を寄せて、

「一ツ事は一度言や澤山ですよ、其先を伺ひませう其先を。」

「ハイ。」

と優長に受けて、

「處で……………」

「不可ない不可ない、處も何も要る話ぢやないのですよ、人の事を咎めといて自分も一ツ事を二度言ふやうだが、お前様にはまだ分つてないやうだから、繰り返して言ひますがね一昨日の晩のありや十二時近くさねわ、筑波君一時にやならなかつたね。」

「ハア。」

「さうだ其時分だ、私が濱町の岡田を、へい左様なら御機嫌好うと出てまだ、其聲が切れるか、切れない中に、私ア最早車を飛び下りてたんだ、見るとお前様、突き當つて倒れたのは筑波君で、しかも傘も無くて、しよ濡の姿さんだらう、お負に此頃は又髪を延ばしてるとし鬚は生へてるし、本統に一時は私も青くある程驚いたんだ、全で死人さんだからね、尤も一時は氣を失つたのだからさうも見わたんだが……………夫から兎も角も岡田屋さんへ擔ぎ込んで、種々醫者にも見て貰ふと、直きに息も吹き返したし、さう怪我也大した事はなかつただけれども、何しても頭が餘程悪いと言ふんだねわ、其中に家の者も走けつたり何かして、岡田屋さんちや賑やかでもあり氣も置けると思つて、昨夜まア此處の家へ

移したやうなもの、まだく自分の家へ迄は動かさぬやうな仕未なのさ、自分ちやの、して氣を張つてくれ共、如何して餘程前々から種々崩してた處へ怪我したんだから、之は餘程大事にしなきゃならないのさ。お負に仲好しの加奈村君はお前様、其晩此人を探すので一夜中歩いたつて言ふんで、今日もまだへこへこになつてるやうな有様で、何かに心細い折からさくだからまア一ツお前様でも色よい返事を聞かして遣つて呉れなきや、實際可哀さうなんだ、處でだね、當人は御存じの通りの熱心家だから、こんな事で芝居を休みたくはない、是非勤めたいと言つて居るのだけれども君、君だつて見たら分るだらうけれど、彼の通りの弱り方で、此前の狂言なども、此人一人で背負て立つた……………大きな聲では言はれないが、まアさう言つても可い位なんで、一通りの骨折ぢやなかつたのだよ全く夫に此病氣も其頃から始まつたのを、押してたのに違ひなのだ。詰り夫は、芝居好かれ、座主に損を掛けまいと言ふ忠義からのさ。ねわ、家來がこんなと思ふんだから御主人も又其處は一ツ酌んで下すつて、今度のお盆だけは申兼ねた御話だが、例の半分次のお給金を戴かしてお貰ひ申して此人を休ませたいと言ふんだ、誤解しちや不可ませんよ、當人は勤めるごんなにしても、勤めると言ふのだけれども、眼に見えて斯う弱つて

るものを、私は座頭として使ふ事も出来ませんし、加奈村も友人として知らぬ顔は出来な
いと言ふんですせ、ちつとも分らない事はありますまい、夫も私共に夫丈の方があれば、
何も煮に切らないのを承知でお前様にお話なんかはしやしませんのさ。けれども口では
大きな事を言つても、實力はない私共、なんだから斯うしてお頼みもする譯なのさね、お
前様も太夫元の重手代として其位の事は計つて下すつても可いだらら私と思ふ。決して
御損にはなりやしませんよ。さうして此人を一月なり半月なり養つてやつて下されば、此
後又何んなにお爲になるか知れやしない。ねえ無い御手許ぢやないのだからお願い申す
のさ、之が又他の人なら危険だとか何ぞかお思ひなされるか知れないけれども、當人は評判
の堅藏の筑波さんで、中に立つてるのが私と加奈村さんなんだ、餘りお前様の方も分らな
い御返事をなさると、後に祟るかも知れませんよ。』

とや、脂下る。

清らかに拭き込んだ欄干の外には、長やかに突き出した軒場に伊豫藤懸う連ねて、見下
せば朝の涼風吹き上る川面青く空晴れて、箱崎町を出づる八厘の渡し船に、背向ひに乗つ
た小娘の帯赤く、日覆の巾は目を射るばかり雪白に、船頭が鉢巻を掠めて水竿が光る――

澁谷は富士野の話をニョリともせず聞いて居たが、此昨一寸身體を揺つて、

『へい……さう被仰いますと私も誠に困るのでございますが、何しろ私の方も大勢の人を
相手に致しますんで、公平に公平にと思ひましても、なか／＼さうは参りませんので……』

と付かぬ事を言ひだして、喫ひかけの巻蓑を又火に摩擦りつける。

どうも、困るねえ、御話が遠くて、如何でせう一ツ急行に願はうちありませんか急行に、

ねえ澁谷さん。』

と富士野は嫌ひな蓑の煙を横へ避けながら、難しい顔をして、足の爪先を小さく刻む。

『否、まづお話の順で申しますのですが、どうも私共も、座長や加奈村さん、又……其筑
波さんのやうな方ばかりならば、如何様にもして御仰る通りにして差上げたいのでござい
ますが、中には……之を此處限りのお話で名前もわざと申しませんか、随分之が聞えます
と、先例があるからと言ふやうな譯で、得たり畏しになる方々も御座いますので、終には
一寸指先の痒いのにも休を言ひ立て……』

『おい、おい澁谷さん、私が御願ひしてる人は指先の痒いのや痛いのとは譯が違ふんだよ。
御覽の通りの有様で、此儘で通したらそんな大病にならねえとも限らないから、當人は

いや、座主へはまだ何にも達しちや居ないのだから、そんな事は申されませんと強つて言ふのを加奈村君や、私が、なに今の中に身體を丈夫にして丁へば此先幾らでも座主へは恩返しは出来るのだし、夫に今迄面倒を掛けた人ぢや無いのだからつて、無理に納得させて斯う云ふ話になつたのだよ、厭に名前と言はないと、何ぞか言つてゐるが、其人達の事は私だつて知つてまさア。彼奴等とお前さん、彼奴等と筑波を一緒にするのは酷いよ、戯言だらう？、戯言だらうけれども情ないね、澁谷さん、ちつとは目端を利かして物を言つて貰ひてねと言ひたい處さ、アツハ、澁谷さん怒つちや不可ない、まさう言つたもんぢやないかと言ふのさ。ね々？』

富士野はぢり、と腹の立つのを堪へて苦笑ひ。澁谷は別に怒るでも無ければ笑ふでも無し、詰り何とも感じぬ風情で、

「否、御尤で筑波さんの御心も又御二方の御親切も能く分つては居りますんで、然し座長なんかは此様な御経験はおありなさいますまいけれ共、私共は之でも何十年となく此道に居りまして、夫は随分苛責られも致しました代り、又今では口巾つたい、事を申しますやうですが、まさ人様を見ましても、一度で此人は！と云ふ鑑定も付くやうになつた積りで

とございます。ですからお蔭様には、さら／＼人にも騙されぬやうにはなつたのでございしますが、之で人間と云ふものは貴君、なか／＼横着なものでございましてな、一度自分の言ひ分が通ると、夫で決して満足はしないもので、きつと二度目を持ちかけます……」

「左様、左様。御言葉の通りだ。が、夫をお前さん、筑波さんに當嵌めるのはちと酷だね、全く酷いよ、冷酷だ、無情と言ふもんです。」

富士野は飽まで思しうとしたが、病人の思はくもと思はれて、偶と見返れば、今迄開いて居たのか、窺れた顔に大きく見ゆる其眼を筑波は急いで閉ぢる。

「まさ可いさ、問答無益として、詰り夫ぢやお前さんの方ぢや私共の要求は入れられないと言ふんですか。」

「否、如何致しまして。私も何卒して御話を整めたいと思ひますので骨も折りました。」

「夫ぢや一體如何すりやア可いんです。」
富士野は突然立ち上つたかと思ふと、裙下を引き合はし、キチリと座り直して腕を組む。遙か隣の待合と思ふ邊に、ガラ／＼とトーンと入口の閉まる音がして、續いてホ、ホ、と云ふ嬌聲が聞けたかと思へば、直ぐ夫も絶えて、晝の中洲のうら靜かに、何處からカリリン

リンリン電話の鈴が響いて来る。

『實は斯うなんでしょう。』

澁谷は膝の前の烟草盆を脇へ摩らすと、一膝前へ進んで、蓑を離した手に忙しく團扇を用ふ。次の間の筑波は再た眼を開いて氣遣はしげに其有様を覗つてる。

富士野は苛立たしげに首を振つたが、又偶と病人を見返ると、筑波は慌て、眼を閉ぢて了ふ。

『澁谷さん、病人も大分氣を揉んでるやうだから、成可くは手取早く、ね。』

『へい、實は……エ、如何で御座います。』

『何が、む？』

『どうも困りますな、さうお急ぎなさいましちやア、ハ、ハ、ハ。』

『ハ、ハ、ハ、ぢやない、何が如何なんだか聞いたんぢやないか、大事の場合なんですよ、此方は笑ひ處ぢやありやしない。』

『へい、どうも……』

『まア可いから其先を聞きませう。』

『へい、では手取早く申し上げるごしまして、御手紙を拜見いたしますと直ぐ太夫元の家へ出かけまして、色々相談を致しましたんでございます。エ、處で、前申上げましたやうな事情で、私の方も他ならぬ方々の御話でございますから、出来るならば被仰る通りにして上げ度いのはあるけれ共、まアを言つた様な譯でもあり、又筑波さんの方に致しましても夫ぢや必心苦しく御思ひなさらう……』

富士野は苦々しげに川面を見下した儘、

『なに其様な事はありやしない、戴くものは夏も小袖さ、太夫元にしちや大變察しが好過ぎるぢやないか。まア先を聞かう、夫から？』

『此中筑波の方を竊かに見て何か領いて居た澁谷は何氣なく話を續けて、』

『へい、夫で之は御相談づくで如何なものでございませうか、私の方では、一寸之で大切な盆興行に人氣役者が缺けると云ふ苛い處を堪へますから、其方も其邊をお察し下さいまして、お渡し致します半金は次の狂言の給金を前借と言ふ事にして戴けますまいか、さうしたら中へお遣入りなすつた方々も、詰らない御心遣ひもなくなると言ふものだし、筑波さん必其方がな、御勝手だらうと申すので……』

「厭にお爲ごかしだね、夫は成程、筑波さんはあゝ言ふ堅い人だから、其方が望みかも知れない。むゝや、知れない處か、止むなく休むならば、さう言ふ事にと言ふ意見もあつたのだが、夫ぢや我々が何の爲に斯うして口を利くのだが分らなくなつて了ふからまア〜お任せなさい、太夫元だつて、さう分らない事を言やしないからと言ふんで、斯う言ふ事になつたんだよ。太夫元も些とは考へて見るが可いちやないか。彼丈の財産で、彼丈の座を持つて、威張つた事を言ふやうだが、兎も角も頭の新しい我々の一座を使つて人ぢやないか、此處で堪へて我々の要求を入れて御覽なさい。今迄の劇界には先づ例の無かつた空前の美譽として、如何して失禮ながら筑波君の給料悉皆出しても出来ないやうな大きな廣告が出来るんですよ。夫と同時に金では買へない價が付きます、位が付きます。私なら、言はれなくても其位な事はするね、あゝすることも。むゝ、澁谷さん夫ぢや斯うしませう、獨断で爲つては加奈村君へは濟まないけれ共、夫では筑波君の方へ出して貰ふ事は全然止めて、私が適當な拜借する事にしませう、夫なら何も不承はあり升まい。其代りに筑波君は私が充分と思ふ丈療養させますから、或は次の狂言にも出せないかも知らないつて歸つたら、太夫元に能く言つて下さい。」

富士野は其儘座を立つて外へ出やうとする、見る／＼色を變へた澁谷は、狼狽へて立ち上ると、其を踏むやら滑園を蹴るやら躊躇として富士野の前に立ち塞がつたが、餘り慌てたので言葉がなかく出て來ない。

「何をするんです、お退きなさい、私ア之から直接に太夫元に逢つて來るんだから。」
澁谷は漸々唾を飲んで、

「夫では誠に……ま何卒、貴君は何も御存じないから御尤……」

「何を私知らないんだ、エ、貴君ぢや話が分らない。」

「まア貴君、まづ〜一度御話を致しますから……」
入れ變つて後から絶るのを、

「放せ。」

振り切つて行かうとする目前へ、何時の間にか床を抜け出した筑波が、蒼白い顔を苦しげに傾けて立ち乍ら、瘦せた両手に富士野の肩先を力なく押へると、見合してハミ口唇を噉んだが、眼の中は共に人の世を泣く涙。

富士野は急がしく二の腕で涙を拭くと、其水際だつて美しい眼元を赤くして笑ひ乍ら、一寸鼻を吸つて、

『可いよ可いよ、もう大丈夫だ、詰らねね疝癪起して飛んだ心配を掛けて了つた。』

言ひながら今しも再び床の中へ助け入れた筑波に優しく蒲團を掛けて遣る。

『有難う、もう好いです。夫よりも座長、稽古が遅れはせんでせうか。』

筑波は氣遣はしげに肩を纏めて言ふ。

『なに未だ時間が早いから……尤も今灘谷の處へ掛つた電話の様な事かも知れない。』

まア其様な事は氣に掛けないで、最小し香氣にして、是から大丈夫と醫師も許し自分にも

危氣の無いやうになつたらば、ゆつくり山へなり海へなりへ出掛けて見るさ。人間てものは取越苦勞をしちや一日だつて安氣に暮せるもんぢやないからね。』

『はア。お陰様で望んでだ旅行も出来ます、座長や加奈村君には何とも御禮の言ひやうは

ありません。』

『さう言はれると如何も君へ對しても加奈村君へ對しても赤面の外は無ね。然し僕が

自分の意見を云ひ張りや、君が其身體で舞臺へ出ると言ふし、太夫元の言ひなり次第にな

るのは餘り残念だし、僕も先刻は實際途方に暮れて了つたよ、加奈村君だと落着いてるか

ら斯う言ふ事には適してゐるんだが、僕のやうな疝癪持にや外交官は勤まらないね、君

もさ僕を肺甲斐ない男と思つたらうが、まア許して呉れ給へ、情ない事には僕も又人の

雇はれ人だ、腹ぢや口惜しくつても彼以上には實際争へないんだから。』

筑波は手を延べて富士野の手を堅と握つて、

『座長、無期限の返済！こんな寛大か貸借が此世の中にありませうか、座長、僕は決して

不満足などと思つてやしません。僕は心から座長の御親切を感謝しごりますよ、只氣遣は

れるのは此先の事で、是程にして戴いた皆様の恩恵に、果して報ゆる事が出来らでせうか

僕は夫を思ふと責任の重きに堪へかねます。僕は實に意志が弱いのですから、此後ごんな

誘惑に逢うて思ある諸君へ仇する様な事になりはせぬかと思ふと、なは一層伊優などは止

めたくなつて了ひます。』

『不可ん、不可ん、君は夫が不可ないのだよ、夫が今も言つた取越し苦勞なんだ、何も君

今度の事だつて、君が誰に誘惑された譯でも何でも無いんで不慮の災難なんだ、此位の事

262

にさう弱つちや餘り意氣地が無さ過る。尤も君は今腦が悪いので、何も彼もさう悲觀的に考へるんだらうけれど、私なんざ何んな苦勞があらうと悲しみがあうと、舞臺つて事を一ツ思ひ出すと只もう斯う天國へでも行つたやうな氣がして斯う心が浮き立つて來るね。考へて見ると全く舞臺は一種の天國だね。どんな悪人に扮つてどんな悪事を働かうとも彼れは決して、其俳優が悪人だから上手と言ふ譯ぢやないので、詰り登場する人々の心に俳優的本性(?)を持つてゐるものならば、きつと扮し得て妙に見るのに相違ないのさ、だから何かの雑誌にも書いてあつた通り、花井お梅が花井お梅に扮したからつて必ずしも其人物を寫し出せるつてもんぢやない、處でだ。之が舞臺ばかりぢやないので、實世間に於いても誰だつてオギャアと生れる時から頰冠りをして尻つこけに三尺を締めてさ、ヤヅウを極めて花道を出るものと心得てるものはありやしない、性は善なりに相違ないんだが、言はれ神々の戯れて悪人にも馬鹿にもされて了ふんだ、そして斯う云ふ人達は自分の本性を死ぬ迄悟らずに了ふのもある中に、我々は夫をぢやんと識別しながら演つてるんだから酷く理想的なのさ、夫を思ふと私は實に斯う言ふ身に成つたのは詰り神の寵兒かんだと思つて有難いのさ、だから従つて舞臺も神聖あるべしだらう、夫を止め度いぢや、は君も

案外下らない事を云ふ人だね。』

筑波は聞き終はると氣の好さうな笑ひを淋しく洩らす。

『アツハ、他人が聞いたら嘸變論を吐くと笑ふだらう、然し君と僕との中で話すんだから、まあ少し位間違つても笑はずに聞いといて呉れ給へ。』

『僕は笑やしませんよ、實際さうに違ひないですからね。』

『まあさう言つて呉れるのは君位のものさ。他處で僕が此様な事を言つて見給へ、忽ち柄にないとか何とか言ふんで攻撃されつちまふのさ。』

『そんな事もありますまい。』

『否有るのだ、大有りなんだよ、此間も去る處で、僕が近松論を吐いたのだね、夫も何もさア之から近松を論じますからお聞き下さいってんで始めた譯ぢやないのさ。相手の其客つてのが、ちつと半可な近松通でね、一から十まで崇め奉つて——しかも横目にちらちら己の方を見やがつて、新劇だとか正劇だとか言つても、チンともツンとも絃に乗る事の出來ないやうちや藝術家とは言はれやしない、せめて一年に一年位は近松ものを出すやうでなくちや頼もしく無いなんて大氣焔なのさ。尤も少し西の方の人でね、東京の事は一向御存

じなし赤のさ。お負けに僕を或る評判の純帳芝居の壯士役者と思ひ込んでたんださうで、後に其時の御主人役をした方が、まア大層先方でも極りを悪がつて話をしたがね。何しろ其凄じい氣焔が餘り面憎く思はれたから、大人げあいとは思つたけれども一寸しゃく、ばり出たと思ひ給へ。先方火のやうに怒つてね君、ごうも見せたかつたよ、あんな表情は見たいたつて滅多に見られやしない。君さんか見やうもんなら、好い参考になるんだまアそんな事は兎も角として、實に夫や憎尿味に新劇を貶し始めて漸に障つたの障らさいのつて、私や之で最う三ツばかり年が若けりや必然取組合になつたと思ふよ。大兵衛の虎鬚でね君、小鼻を怒らして目を斯う、蛙の手のやうな肉の厚い手を丸く握りしめてね其奴を斯う四角に座つた羽根蒲團のやうに脹れ上つた膝の上に突いてセイ、息を吹いてる風つたら、實際見物だつたよ、夫が君後にはね、む、？、彼が早蕨座の富士野かい君は單に書生役者だとのみ言つたから下らない奴かと思つたんだつて、其人が又情け加減を話す様子つたら無いんだよ、其處さんだ君、下らぬ書生役者かと思つたから生意氣だと言つたと言つたね、夫が私ア癪に障るのさ、下らぬのだらうが下つてるのだらうが、ごうせ現在の役者にさう學問のある奴は居ないのは知れてるんだから、何もさう君、天から

生意氣々々で押し付けずとも、間違つても言ふ丈の勇氣を賞めて、さて其間違つた處を教へて呉れるが可いちやないか、夫が親切と言ふもんだ。夫を君、全で頭ごなしなんだから夫ならんで此方も其筆法で近頃流行の文士劇と言ふやうな物を、何だ舞臺の経験の無い癪に生意氣だと言つたら如何だらう、我々のやうに口を黙んぢやお出でなさりやまい詰り學問があつて筆が立つから、ごんぢにでも言ひ負かさなきや承知しないに違ひない、だ、夫ぢや君、文學者と役者との接近なんてものは到底も出来るもんぢやありやしない、分りきつた話なんだけれども出来あから可笑しいぢやないか。否、一方から言や大きに接近はして、現に我々だつて大抵の文士先生とはお近付にあつて、けれ共大事な目的問題になるとお互ひに鬼こつこをして捕まねやうと思ふとてん、逃げて歩いてるんだから不思議でしやうが……口惜しいが僕なんか最早六十の手習だ、君達が一ツ勉強してね、家の子孫を造つて呉れちや我々は浮ばれ無い……」

斯かる處へ扇をゆる／＼と使ひ乍ら澁谷が這入つて来る。

「ごうも失禮しました。」

「大分長かつたね、何處から？」

「へい、加奈村さんが稽古場からでございました、種々筑波さんの御様子をお聞きなさいまして、あの方の事も酷く御心配でございましたから私の考へで、其結果丈お話致して置きました、エ、座長も何卒そのお積りで……」

「筋道は言はないと言ふんだね。」

「へい其方が筑波さんもお望みだらうと存じまして。」

「さうかい筑波君、其方が可い可い？、さうか、夫なら可いや、已も言ふまい。」

「夫で只今座主の處へも掛けましたが、一寸直接に貴君から證人だと言ふ事を伺ひ度いさうで御座いますから恐れ入りますが電話口迄。」

「面倒だな、承知したと言ひさへすりや好いんだね、一寸行つて来る。」

出て行く後姿を筑波は静かに見送つてから、

「澁谷さん。」

「へい。」

「僕は謝感しますよ、君は能く秘密を守つて下さつた。」

「何の、私は之でも男の積でございます。」

「……………」

「ヨオ、へど〜の大將、遂々出掛けて來ましたね。」

最早掛けて來たのか戸の外に富士野の聲。

「ヤア、どうも色々有難う談判は上手く成功したさうぞ？」

「ウム、ま〜〜兎に角。」

「やう〜稽古場まで來て見ると、どうも君はつかりに任しとくのが失敬の様でな、ごんちちやらう病人は？」

「まア何卒先生御診察を……」

「ツフ、まアお還入り——」

「失敬。」

富士野を先に這入つて來た加奈村は、嬉しさうな眼を見張つてる筑波を一目見ると、

「こりアや外案可い顔色ぢや。」

「そりやア僕の看護だものアハ。」

「さうぢやつたね、イヤ澁谷さん、最前は失敬しました、大分貯蓄りましたか。」

と例の微笑かに戯れつゝ座ると今日は、腰から蛇豆の煙管を取り出す。

(二十九)

新橋發神戸行の列車がほつと一息吐くと更に亦新しい勢を籠めるやうに瀛海を鳴らして、國府津停車場を乗り出して午後も四時過、大磯茅が崎で下りた避暑客も多し中で最も人の目を引き袖引かせたる美しい二人連の女は、此處に惜しむ別れのこと言ひ度げな二等室に移り香のみを残して構内を出ると、しどろくと降る雨の中を折から出迎への葛屋が番傘逢合に擔いで、宿引に小さからぬ鞆二ツを擔はした儘程近い宿の門を這入る。

『入らつしやいまして。』

『お出でなさいまして。』

と業々して式臺に頭を並べる下婢ども、不意を食つて物慣れぬ若い方は顔を赤めて打背いたが、入口の真正面に立つた大姿見に、迎へる人々の派手な帯を腰に纏ふ花かどばかり映し出した傘の中、雨ながら鮮明と久しぶりに菊代の顔お妻の顔。

『どうぞ此方へ。』

下婢の案内に二人は其新築の離座敷へ通る、其處は二間續きの八疊の廻り縁、前栽に遠く松を植えて海も遙かに沖を見渡す。

『お、暑い暑い、姉さんお前さん濟まないけれどもお冷水を持って来て下さいな。』

お妻は室に這入ると直ぐ足袋を脱ぎ乍ら、次の間の中仕切の襖を閉めて下婢に云ふ、

『ハイ、あの御洗面のでございますか、召上るのでございますか。』

『どうねら。』

と一寸考へて、

『濟まないけれど、兩方持つて来て頂戴な。』

菊代は縁に立つて扇を用つて居たが、振り歸つて、

『ホ、慾張なこと。』

『オホ、い、い、い。』

と下婢も調子を合して笑ひ乍ら、

『あの召上るのは只今持つて参りますが、お洗面は、お風呂が沸いて居りますから御都合でお這入り遊ばしちや如何でございますか。』

「あら、さう、夫は尙結構、夫では……直ぐ這入れるの。」

「ハイ、宜しうございます、夫ちや只今お冷水を。」

「一寸、一寸、もうお冷水は澤山、夫よりも湯殿へ案内して下さいな。」

「ホ、さやうでございますか、夫ちやお浴衣を……」

「否夫も澤山、此儘行きますから、後から持つて来て呉れ、ば好くつてよ。」

「さやうで、大さうお氣が早くて入らつしやいますこと。」

「江戸ッ子なもの。」

「オホ、、、」

「夫ちや菊代さん、貴女も後から入らつしやい、さうして然んなにきちんとしてないで帯でも解いて涼んで入らつしやいよ。」

「どうも憚り様。」

と菊代は優しく言つて笑つてる、

「まア憎らしい、人が親切言にふのに。」

「オホ、まアお風呂へ入らつしやい、貴女一寸失禮を、只今直ぐ参ります。」

下婢は菊代に挨拶して先に立つと、其中にお妻は帯丈解いてやがて室を出る。間もなく下婢はお妻の着物と一處に貸浴衣を抱へて這入つて来る、後から小女が茶道具を運んで来たが之は直ぐに出てゆく、

「お連様は誠に元氣な方でござますね。」

下婢はお妻の勝色辨慶の養老縮を衣紋竹へ掛けながら言ふと、

「わ、ほんとに面白い方なのよ。」

「さやうで御座いますね、貴女お召替を。」

下婢はお妻が解き捨てた利久茶地に白く片輪車を染め抜いた絹の帯を片寄せて、今持つて来た白地に鬼鷲を染めた浴衣を取つて菊代の後へ廻ると、

「さう。」

と柔順しく菊代は扇を置いて立上る、藤鼠の瀧縮の明石縮に、檻隈地の細博多を締めた旅姿の、何處と取り立つて言ふ處も無いけれども水塚の銀杏返しに、亂れ毛か、腰帯の蕨模様の色入か、淋しげに艶に、雨の夕暮を浮き出したやうな美しさ。

「どうも憚り様！」

菊代は下婢から浴衣を取つてはらりと着替へる、二の腕あたりチラと雪の肌、腰に絡んで白地の縮緬縮に魚菊を染めた蹴出が見えて、薇薔の香がばつと揺る。

「大變暗くなつて来た事ねえ。」

菊代は浴衣の襖元をきつと合して、解き捨てた紫の曙の伊達巻を巻きながら言ふと「さやうでございませう、斯うして置いて一寸お洋燈を持つて参りませう。」

下婢は豊みかけた帯を其儘立ちかけると、

「アラ催促したのぢやないのよ。」

と菊代は赤なつて言譯をする、

「まア御遠慮深くて入らつしやいますこと、オホ、と。」

と下婢は無頓着に廊下をばた／＼と走れて行く。見渡す海は尙白く暮れ残りながら松の葉は早や夜の色を黒く籠めて、遠寄に最早蚊の聲もする、菊代は浴衣の廣袖なのを氣にしなから、しきりに胸元を扇いて居ると、誰も居ぬと思つた隣の室に人の唸る聲がする。思ひがけなかつたのでハットして胸を露かすと、其儘後は静まり返つて何の音もしない。

「何だらう？」

菊代は恐氣だつて最早扇も使はず身體を堅く目を据ゑて居ると、間も無く廊下に先の下婢の聲がして賑やかに笑ひながら此方へ来る。

「オホ、海の深さは何尺なのか私にも分りませんですよ、まアお嬢様は何尺とお思

ひになりますか？」

と何か幼さい子に話しかけて居る様子、子供は恥かんでるのか一向に聲が聞ぬ。

「お分りになりませんか、オホ、夫ぢやお兄様にお聞きになりました、私にもお教

へになつて下さいませう。」

聲はだん／＼に近く、隣の前まで来たかと思ふと、

「夫では又明日お二階へ参りませうね、おやまだ旦那様はお寝みなすつて入らつしやいませよ、オホ、お洋燈は此所へ置きますから好うございませうか、只今直きにお話に参りますよ。」

言ひ捨てて下婢は此所へ這入つて来たが、

「どうも遅なりました。」

と洋燈を置いて、

「貴女、お風呂は如何でございます、其中に此處をお片附申ませう。」

菊代は隣りの唸り聲を今下婢が言つた「旦那様」のご知れたので、漸くはつご息を吐く下婢は聞き答めて、

「おや溜息なんぞなさいまして、如何か遊ばしましたか。」

「ホ、否。」

「でも貴女。」

「否何でも無いの、今ね、誰も居ないと思つた、お隣室で、何だか唸る様な聲がしたから仰天して居た處だつたのよ。」

「おや左様で御座いましたか、ホ、。ついお断り申すのを忘れましたのでございますけれ共、お二人連の御兄妹でございますね、まア其御嬢様が如何程にお可愛うございませう、只今迄二階へ遊びに入らしたのでございますよ、雨がびし降りますのにお兄様が寝つてお了ひにありましたもんでございますから、起きてお了ひになりましたね。」

「さう、夫ぢや淋しくなくて好い事ね。」

「さうでございますよ、後程にお嬢様をお連れ申して参りませう。」

「夫はくるくくと思つて入らつしやいまして。」

と話し下婢は四邊を片付けて、漸く茶道具に手の出た、ばたくと上草履を引扱つて来るのはお妻らしいと菊代の思ふ間もなく、

「あら。」

と突柏子も無い聲で其人は叫んだが、

「まア、お前さんも来て居たの。」

さらちと隣室の幸簾を開けて這つた氣勢に、此方の二人は不思議顔を見合してると今度は此間へ通ふ、襖を開けて、

「菊ちゃん、筑波さんよ。」

お妻は湯上りに上氣した顔を嬉しげに婉やかして、持前の大きな眼をくるくくこやる。

「さう。」
と言つた儘、菊代は暫く二の句が次げなかつた。胸は怪しく波を打つて、次第に上氣せて来るのが自分にも能く分る。

「ホ、眞赤になつてさ、そんなに仰天したの、まア可いから入らつしやいな。」

とお妻は小手招く。此有様を呆氣に取られて見て居た下婢は、始めて口を切つて、
『御存じの方で入らつしやいますの。』

とお妻の顔を見る。

『わゝ、もうすつと……ホ、菊ちゃん入らつしやいよ。』

『ありがたう、後に……』

『何故可いちやありませんか。』

『でも此様な浴衣がけて……』

『まアなんなに氣取るもんぢやなくてよ、ね筑波さん浴衣がけだつて何だつて菊ちゃんの美しいのに變りはありやしませんやねわ。』

と振り返つて聞く。内では何と言つたか言はぬのか、聲は此所までは届かなかつたが、お妻は又俄かに笑ひ出して、

『ホ、いやだよまア、此人も眞赤になつてさ、ほんごに恥しがりやのお揃ひには驚いた。夫ではまア菊ちゃん貴女お湯にでも這入つて入らつしやい。夫から悠然お話しする事にしませう。ね、お湯へ這入つて入らつしやいよ丁度好い加減だから。』

『さうでは一寸。』

と立ち上ると、心得顔に先に立つ下婢の背に引付くやうに引添うて、隣室の前を走け抜けるやうにして出て行く。

『ほんごにあの人は十九にもなつて子供見たいだよ。』

お妻は其儘筑波の室に座つて了ふ。

『幾時お出ででした？』

筑波は同じ貸浴衣の、瘦せた肩にふわつくのを克明に着て、並寝の後の故か稍蒼ざめた頬に、何を枕の名残か、二筋三筋堅に赤く跡が付いてる。

『さうね、ほんの今しがたでしたよ。お前さんは幾時から。』

『昨晚でした。』

『さう？ 昨夜芝居へ行つたけれども誰もそんな話はしなかつたから、ちつとも知らなかつた夫で之から何所へ行くの、こんな所に長く居る譯でも無いんでせう。』

『ハ、實は箱根の方に誠ちゃんが行つて居られるものですから、約束もありますし、遊びかた〜行つて見やうと思ひまして。』

『誠にやんて築地のかい。』

『ハイ。』

『さう？でも是非行かなくちやならない譯でも無いんでせう。』

『夫は都合では止めても可いですけども。』

『そんなら、此所で遊ばうぢやないか、私達も何所つて當があつて出て来た譯ぢやないのだから、少しでもお連の多い方が可いから、さうおしなさいな、わ？筑波さん。』

『ハア然し。』

誠吉この約束は遠からの事、都合で止めて可いなごと如何して言つたらうと、今更當惑の眉を擧める。

『然し何さ。』

『斯う雨では詰りません。』

『だからさ、雨が降るから餘計お連も欲しいぢやないか。如何してこの雨はなか／＼止まないよ。』

と眞面目な顔をして外を透して見る。

筑波も同じやうに表を見たが、一寸苦笑ひして俯向いて了ふ。

『さう／＼お前さんの怪我は最早快いんですか、つい御見舞申すのを忘れちやつた、ホ、ホ、。一體何處を打つたの。』

お妻は臆面も無く筑波の頭を見廻す。

『ナニ少しばかりで、最早癒つて終ひました。』

『だつて芝居を休んでる位だから餘程だと思つてたんですよ、菊ちゃんも酷く心配してたから宜しく御禮をお言ひなさいよホ、ホ、。』

嘘か誠か筑波は直ぐに疑つたが、怪しう弄られた氣もして思はずお妻の顔をきつと見据ゑる。

お妻は夫とも心附かず、

『お前さん其處に居るのは妹さんなの。』

『ハ。』

と後を向くと、お露は知らぬ人を耻かんで筑波の背中に小さくなつて隠れて居る。
『露ちゃん、お客様に御辭儀は。』

と言ふと、そつと顔を出して優しく手をついて丁寧な首を下げる。

『まア、柔順しい事、此方へ入らつしやいな。』

お妻も引入られたやうに首を傾けてお出でくをする、つと立つて明るい處へ出たか、直ぐに座つて兄の膝へもたれて、まぢく、ご客の顔を見て居る。

『まア可愛い事、けれどもお前さんにや似て居ないねわ。』

『さうですか。』

と言つた儘筑波は何か考へてる、話が途切れて座が白けると、紛れて聞かなかつた浪の音が轟々と耳立つて、風が添つたか一しきり一しきりに吹きつける雨の、亞鉛の庇に姦しく響く。

『あ、何だか薄ら寒くなつて来たこと、其でお前さん病氣の方もすつかり快いの。』

『ハア。』

と一向返事が冴わない。

『如何したの、急に酔き込んだちやつたぢやないの、如何かしたんですか。』

『否。』

張合の無い答へやう。

何だか變ねわ、まア兎も角二三日は逗留なさいよ。ね、ちやア又後に別荘を連れて話に來ませう、私ぢやお氣に入りさうも無いハ、ハ、ハ。』

奥底も無く笑つて立ち上る。

『まア宜しいぢやありませんか、僕は一體不愛想なのだから、立腹されると非常に困ります、まア遊んで入らして下さいさ。』

筑波は俄かに面を直して切りに止める。

『嫌な、誰が怒るもんですか、男の癖にもちつと腹を大きくお持ちなさいよ、では又後で來ます、お露ちやん遊びに入らつしやいな。』

とお妻は其儘襖を後手に開けて我が室へ歸る、菊代は何時の間には風呂から歸つて居たのか、薄化粧の香り仄かに、着替への浴衣は紺地に白く秋草の亂れ咲き、帯は桔梗紫の絹に白く觀世水、極く薄く淡紅色の帶止を締めてる。

『まア、すつかり、お召替ね、私の風。』

お妻は我身を見返つて呆れ顔をする。

『何だか嫌に涼しくなつた事ねわ。』

菊代は手荷物を片付けてた手を止めてお妻を迎へる。

『ほんごにねわ、今日はまだ八月の二日だつて言ふのに如何したんでせう、けれども之で又雨が上ると堪らなくなるのよ。』

『さうでせうねわ。』

話の中にお妻も手早く鼠と白どの市松の縮に、焦茶地の羽二重に銀杏の葉を白抜にした帯を三重廻してぐつと締めた儘。

『さアお召替も出来て瀟洒したこと、お茶でも戴きませう。』

疲勞したやうにべたりと座つて片隅に置いた火鉢の上の鐵瓶に指を觸れて見る。

『あゝ可い挨拶に湧いてる、片付物なんか後にして貴女も入らつしやいよ。』

『ありがたう。今行つてよ。』

菊代はこそく片付けて側へ来る。

『ハイ召上げ。』

お妻は茶を出して、後を自分のに注ぎ乍ら聲を擧げて、

『ねに菊ちゃん、此處に筑波が来てやうとは思はなかつたわね、私は不思議でしやうが無いんよ。』

『さうねわ、けれども、私達が何と思つて此處へ下りたのか其方が不思議なんでせう？下りて見るとほんごに海なんかあつて思ひがけなかつたのねわ。』

『言は、神様の御引合せでせうよ、私の胸を際してさ、と柏屋の彼女なら言ふ處ねわ。』と笑ひ流す。

『さうねわ。』

と軽く言つた積りの菊代、返事は如何したのか酷く沈んで居た。

(三十)

筑波お妻の一行が雨の國府津の假の宿りも最早五日になる。しよざいなさの話敵に、菊代も筑波も以前より、口數も利き、一々顔を赤め合はぬやうにもなつた。相變らず元氣なのはお妻で、しよざい、と秋雨らしく降る雨の、誰も倦んじ顔に見る中に、此人ばかりは晴やかに常時春のやうな顔。

『今日はお婆さんは何方へお出で、すか。』

筑波は明放した隣の室から聲を掛ける。

『あの御吾妻様とか申しますのね、あの後の山の上にあるんださうですよ、其處へ行つて見るとお出かけなさいましたよ。』

と菊代は書きかけの手紙を置いて振り返ると、同じやうに机に向つて書筆を玩んでた筑波と斜かひに思はず顔を見合せて幽かに頬笑むだが、心弱くも直ぐにうち背いて終ふ。

『盛んですなア。』

筑波は後向になつた儘只矢鱈に筆を動かす。

お露は室の隅に、詫ち顔淋しく只一人、お彈を並べて見たり蒔いて見たり並べて見たり蒔いて見たりしてゐる。

『露ちゃんは何なさいました？』

今度は菊代の方から聲を掛ける。之を聞くと筑波は狼狽へたやうに又振り返つたが、菊代は向ふを向いた儘だつたので、僅かにお納戸矢継の其肩が見わたす許り。

『淋しがつて居ります。』

『此方へ入らつしやいな。』

手紙の表記をすらくと書き了へて筆を置く、袂から紛悦を出して手を拭きながら思ひやかに筑波の室を覗く。

『露ちゃん、行つて御覽、お彈きを持つて。』

お露は無言に兄の顔を仰いだが直ぐに手近の香箱へお彈きを入れて、いそぐと立つて来る、

『此方へ、真中へ出ませう、此處は暗いから……ね。』

手を引いて机の側を離れると、菊代は襖際へ隠れるやうに座つて、お露と向ひ合ふ。

『兄さん……』

とお露はお彈きを抱へた儘又立ちさうにするのを、

『兄さんは今御用でせう後で入らつしやるから二人でしませう。』

『でも……』

とお露は菊代の袖を潜りぬけて筑波の背に被りついて何か頻りに内證話。

『むっむ、今直きに行く。』

『直ぐ……』

とお露の聲はやく鼻に掛つて眉を寄せて一寸眉を振る。

『あゝ直ぐ行くから、お前行つといで。』

『きつとよ。』

『むゝ、之を書いて終ふと行く。』

と筑波はさも大事さうに筆を離さない、けれども前に広げた紙には別に纏つたものが書いてあるのでも無かつた。

お露は安心したやうに、元の座へ歸つたが、直ぐに首を延ばして、

『兄さん入らつしやい。』

筑波は思ひ切つたやうに筆を置いて突ち立ち上ると、之も襖際ながら向ひ合せの彼方に座つてお露をさし招ぐ。嬉しさうに走けよつた妹を膝に引抱いて目も鼻も無く顔に顔をさし寄せたが、直ぐ真面目に面を上げて、菊代の顔をちつと見て又お露に眼を移すと、

『菊代さん、僕は明日出發たうかと思ひます。』

聲が震へて耳朶にさつと紅を漲す。

『まあ急にそんな事を……』

菊代は其涼しい眼を見張つて俯和いてる筑波を思はずも見詰めたが、何時まで経つても相手は俯向いた儘なので、精一ばいの勇氣を振つて、

『如何言ふ譯で……』

と訊いて見る。

『譯などは別にならのですけれど……僕は出發つた方が好いかと思ひまして……』

と尚顔は上げず、可愛いお露の手を上下に動かしながら、溢り勝の調子に言ふ。

『好いかと思ふつて貴君、何か御都合でもおありになりますの。』

『都合……と言ふのでもありませんけれど……』

『如何言ふ……』

と言ひさして菊代も押して聞くのも恐ろしい様な氣がするので、二人の話は一向に進まなう。

『兄さんお弾きしませう。』

罪のないお露の聲を、二人は聞き切つた咽を濕されるやうに聞いて、同時に顔を上げる。

ど、思はず見合して、又狼狽て俯向いたが、双方ともに此瞬間に何事かを語り合つたやうな気がした。

雨は小止なく降り續けて、其間を浪の音、笛の響き、夫を物憂げに傳はつて、何處の室からか洩れて来る手風琴の調が眠けさすやうに耳へ這入つて来る。

『せめて、雨の止む迄入らしても好いぢやございませぬか。』
幾度か躊躇ひ躊躇ひ是丈を言つて、菊代は又後の文句を考へる。直ぐに續けなければ折角捕へたものを逃がして了ふやうな気がしてならぬ。

『夫は僕は何時までも……ですけれども、約束もありませぬし……妹も倦きたやうですから。』

俯向きままに横から例の優らしい眼を上げて菊代を見て、直ぐに又お露の前髪のリボンに眼を移す。

『でも……』

『……』

『……お妻さんは仰天なされるのでせう。』

『然し是非出発しなければならぬと言ふ譯でも無いのです。』

『夫ならもう少しは……其にもう滅多に此様な折はございませぬから……』

『ですが僕が居りますと、折角遊びにお出でになつて貴女方が、氣を詰めて居られるやうな事はありませんかと思ひまして……』

『そんな事はありや致しません、却つて私共こそ御保養の御邪魔をして……』

『……夫に……斯うして折角お目に掛つても、僕のやうな地位の違つたものは、陸な御話しもされませぬし……』

『そんな事を御仰つちや困ります、……夫ども……』

と顔を赤めて、

『私共が何か失禮な事でもしましたかしら。』

『否そんな……そんな事はありませんですから……實は、僕は貴女がお歸りになり度うと言つて居られると言ふ事を聞きましたので……』

『まあ誰から。』

『……お妻さんがさう言つて居られました。』

「何時でございませう。」

「貴女が風呂へ行かれた折でした。菊代さんは大變僕に氣を置いて居られると言ふ事で……詰り……夫も僕が俳優などでなかつたらと思ひましたらば僕は非常に残念で……一層お別れした方が好いかと思ひまして……」

「まあ餘り……私こそ残念でございます……」

後は言ひ得ず菊代は又しても燃ゆるように面を染めて、何時か目は涙に濕ふ。

(三十一)

筑波は何時覺めたとも無く眼を開くと、枕元の有明は消えて了つて、夜が明けたのか、蚊張越しに硝子張りの欄間は薄明るくなるつて、今しがた瀛車の音がしたやうだが、一番かしら貸車知らん、夜が明けたにしては未だ何處も起きて居らぬ様子、聞き澄すと浪の音が厭に静かで何處やら間が抜けてる。如何したのだらう、何だか物足らねやうな思つてる端途に、椽近くタラタラと雨滴の滴る音がする。うむ、雨が止んでるのだ、何にしても幾時かしら、隣室もまだ夢の最中らしい、水汲も音も聞わて來ぬ、手探りに蒲團の下

懐中時計を出して透して見ると、まだ漸つと四時を二十分過ぎた計り。

「早いなア、見間違ひかしら。」

今一度取つて、銀側の小形なのを床の上に置いて腹這に眼を近づけると、其硝子蓋がキラ／＼と光つて明るく、時間間違ひはない。

「早いなア、濱邊は。」

と思ひながら側を見れば、お露は昔の唇を幽かに開いてすやくと、枕さへ脱して眠りこけてる、

と隣室誰とも知れず「アツ」と叫ぶ聲がしたので、筑波は我にもあらずガバと跳ね起きる隣室では、

「如何したの菊ちゃん、菊ちゃん如何したの。」

とお妻が頻りに起してる様子。

「ありがたう、如何もしやしないのよ。」

襖に近くさし寄せた筑波の耳に、懐しい之は菊代の聞

「夢でも見たの。」

「さう。」

『そんな夢。』

『あのね、何だか能く分らないんですけれどもね、何でも大變恐い事があつて、私が東京へ逃げて行かうと思つて停車場へ行くのよ、而して流車へ一足掛けた途端に車が出たんで不意と前へ倒つたのよ。』

『あ、夫で仰天したの。』

『否夫がね、始めは自分だつたのだけれども流車道へ落ちた人は私ぢや無いのよ。』

『誰なの。』

『誰つてねわ………止ませうよ、其落ちる時私を見た顔は眼に付いてるから。』

『だつて言つたつて好いちやありませんか。』

『夫や悪い事は無いけれども縁起でも無いしまだ夜が開けないのに氣味が悪いから厭よ。』

『弱虫ね、而して其人は流車に轢かれたの？』

『まア如何でも好いわ、明日にしませう。あ、厭な夢だ事、如何してそんな夢を見たんでせう。』

『夫は、そら昨夜此處を立つとか立たないとか、お隣室のと論判したでせう、夫だから見たのよ、お負に人が戯言半分にあの人に言つた事を本氣にしたり何かした罰なのよ。』

『あら厭な、何にしても早く夜が開けると好いのねわ。』

『さうねわ、明日はきつと御天氣でせう、空も薄明るいし雨も止んでるわ、ね？』

『さうねわ。』

夫からは二人ともに寝つかれぬと見て、枕の軌る音と共に、絶えずうぐぐと話聲が續いて居たが、筑波は假初に身を起した俯伏しの儘、二度目に眼の覺めた時は朝風に蚊張が靡いて、秋らしい薄日影の椽に、お妻菊代は最早散歩がへりか、朝露の河原撫子を筒切の花活に生けて居て、眼を開けた筑波を見ざる矢庭にお妻が、

『寢坊だねわ、早くお起きよ、そして今日は御名残に濱へ行きませう、私達は明日御出發せうよ。』

『あら、ほんご。』

筑波よりは菊代が先に不審を立てる。

『ハ、ハ、ハ、又一ッ騙された。ほんとにお前さん達の人の好いには驚いて了ふ。』

た妻は撫子の枯葉を捨て、座敷へ進入ると、又其所から、
『ほんごに筑波さん、貴君起きたら濱へ行つて見ませう。全く私達明日あたりお天気なら
出發つかも知れないから。』

『そうですか、夫ぢや直きに行きませう。』

『ほんごにお妻さん明日出發つ。』

菊代は尙様で花を直しながら訊く。

『だつて別段面白くも無い此地に居たつて仕様が無いぢやありませんか。』

『でも今迄居て……………』

『夫は雨の爲め仕方無く居たのだけ。筑波さんだつて御天氣になれば兎も角も箱根へ行く
んせう。』

『夫は行く事は行きますが、一日二日は海も見て行きたいですね。』

『まア何てんだらう、昨夜は今にも歸るやうな事を言つてながら、又そんな事を言ふの。』

『……………』

筑波は何も答へず僅かに顔を赤らめて蚊帳を出る、お妻は何をしてるのか尙室を出す、

『ね、何故さう氣が變るの、菊ぢやんもさうね、此間中は詰らないから歸らうか歸らう
かつて言ふのに一向歸り度くもなさうだつたし、昨夜は又如何言ふ加減かいやに歸りた
がつて、今朝は又此地に居たいのね。』

『さう言ふ譯ぢや無いけれども……………』

『總て筑波さんの御心次第なの。さうせ私は御邪魔でござります。』

菊代は仰天したやうに筑波の室を見返ると、主は早や影も無く湯殿あたりに頻りに口を
覆ぐ氣色がする。

『戯言は置いて私の缺は知らなくつて。』

『お妻は面真目な顔をして出て来る。』

『まア……………』

『なにか「まア」なの。』

『私……………』

『私……………何?』

菊代は戯言にもせよ今の様な事を言ふ積だつただけれども、餘りにお妻が眞面目な

のに言ひ損れて了ふ。

『何でも無いの。』

『何でも無かないのよ、鉄を知らなくて、幾ら探しても無いんですもの。』

『夫ちや私の針箱かも知れないわ、今見て上げませう。』

菊代は身輕に立ち上つて地袋の前へ行つたかと思ふと、間もなく鈴のついた鉄を持つて来る。

『之でせう?』

『あら何處に有つて。』

『貴女の針箱の蓋の上。』

『まア嫌だ、ほんちに私は粗忽つかしいよ、ねえ筑波さんお前さんも叫いお出發さなす。』

とお妻は襟先で、今受取つた鉄で爪を取りながら言ふ。

『ホ、ホ、た留守よお隣は。』

『嘘、何か音がしてゐるぢやありませんか。』

と覗き込んで、

『わや、ほんごだ、露ちやん今起きたの、寢坊だねわ。』

た露は驚はれ眼に蚊帳を出たがニコニコと、答れるやうに笑つたかと思ふと筒袖を着た兩手に眼を擦りながら、大きな上草履を引括つて、バタ／＼と體を振りながら湯殿の方へ歩いて行く。

『ほんごに露ちやんは可愛いのね。』

菊代は挿し残しの撫子をお妻の銀杏返しに差してやりながらお露に見惚れてる。

『夫やさうよ、筑波さんの妹ですもの、ねえ菊ちやん。』

と胡散らしく菊代の顔を覗いて、面白さうに笑つてる。

『娘。もう私そんな事はかり言ふのですもの、夫ちや話も出来ないね。』

もう一枝を自分の髪に差しながら菊代の聲は少し遠へる。

『シテ戲言ぢやありませんか、ほんごに私こそお前さん達に逢つちや物も言はれやしな。』

暫くは二人とも黙つて、お妻が爪を剪る音と、夫に連れる鉄の鈴の音のみが優しく響い

だが、半時と置かず又お妻の方から口を利く。

『菊ちゃん怒つたの。』

『否。』

『だつて黙つてゐる。』

『貴女が黙つるんですもの。』

『夫ぢや又多辯るから最早怒りつこなしよ。』

『わゝ！』

『あのね。』

『わゝ！』

『筑波さんのね。』

『わゝ！』

『嫌だこと、エ、エ、言つてる許しで。』

『でも外に言ひやうがないんですもの。』

『成程とか何とかお言ひなさいよ。』

『夫ぢや、成程………夫から。』
『ホ、ホ、正直だよ此人は………否ね、彼のお露ちゃんね、今に澤山仕込んで女優にするんだつてね。』

『そんな噂ね。』
『噂ぢや無いのよ、筑波さんも此間さう言つてよ、自分はもう、少し時代遅れだから妹に充分名を挙げさせるんだつて。げれども彼の人だつて決して時代遅ぢや無いわね、其証據には早坂座の彼の人の人氣を見れば直ぐ知れるわ、さう大して容貌が可いつて言ふのでも無いけれども一寸人の氣を引くやうな處があるのね。富士野さんと比べて見ると、顔立なんか全で違つてるけれども、富士野さんののは、餘り立派過ぎて明るいから、氣凛とされる恐いやうな時がある、けれども筑波さんのは、何處かに淋しい人懐い處があるから人に好かれるのね、夫に彼の藝風が一風違つて、何だつてね、今大坂で大變好い何とか言ふ立役が大變好く似てるんだつて………道具で言へば富士野さんは、もう全然恥が出さつて、形にも疵が無いし、貫目にも不足の無い品物だから、うっかり素人が手を出せやしさいけれども、筑波さんのは之から手掛ければ手掛ける程艶も出れば味も出やうと言

ふんだから、彼方からも此方からも手が出る筈ね。だから彼の方は餘程氣を強く持つて充分持手を選ばないと、飛んだ縁日ものになつて終はないとも限らない事よ、夫に大層家の方にも苦勞が………」

『一寸来てよ。』

お妻は一寸振返つた儘、厭に澄して了ふ、

『お早う。』

筑波は艶々とした顔を見せて立ちながら改めて挨拶。

『お早う。』

お露も同じやうに之は襟へ手を任じて辭儀。

『どうも御丁寧に。』

と菊代は微笑む。

『筑波さん大分長がつたね、噂が出やしなかつて?』

『出ましたよ、大きなのが二つばかり、きつと悪口でせう。』

と今朝は存外口軽。

『あら三つでございましてよ。』

と除に來た下婢が後から頓狂に言つて笑ふと、

『嘘、一つだらう?』

『否四つでせう?』

と菊代までが戲言口、お露は譯が分らず皆々の顔を交るゝ見て居る。

『まあそんな事は好いにして、筑波さん顔洗つたら散歩に行きませう。』

『オホ、まだ貴女、此方は御飯が濟んでをりません。』

と下婢は蚊帳を疊みながら言ふ。

『然うねえ。ほんとに、……まあ今朝は私や如何したんだらう、最前から失敗ないばかりしてゐるんだよ。』

『全く如何したんでせう。』

『如何も昨夜の夢見が悪かつた、さう、夢と言へばね、筑波さん——もつと此方へ入らつしやいな采配の塵が掛るから——菊ちゃんかね筑波さん、昨夜大變な酔を出したのよ、貴君知らなかつて。』

筑波は然り氣づく、

『存じません。』

『さう？ 其夢がね大變なのよ、貴君の夢なのよ。』

『あら又、お妻さんは彼んな戯言ばかり云ふんで。』

『ハ、ハ、ハ、筑波さんと言ふのは嘘だけれど、何でも鐘氣味が悪いのだったわね。話して御覽なさい。』

『嫌、氣味が悪いから。』

『氣味が悪いつて高が夢ぢやありませんか、言つて御覽なさいよ。』

『話して御覽遊ばせよ、夢は逆夢と言ひますもの。』

と下婢迄が采配を持つた儘寄つて来る。

『話しても好いんですけれど、全く言へば此中に居る方の夢ですもの。』

『ぢや矢張り筑波さん？』

『嫌、私氣味が悪いから……』

『一體ごんな、でしたつて、聞いたら共忘れたのよ、まあ大體ごんぢの？』

『そら、話したぢやありませんか。ね。』

『分らない。』

『あら、落ちたのよ。』

『落ちた？ チョッ、縁起が好いのね。』

『如何して。』

『だつて私の家なんかは落ちるのは縁起が好いのよ、ね。筑波さん。』

處へ慌たしく少女が電報紙を持って走つて来て、

『あの山川さんに。』

『私。』

と妻は直ぐ開いて見て、

『そら、言はない事ぢや無いわ、大當よ。』

『何が？』

『此間一寸入札の話をしたでせう、彼が落ちたのよ。夫でね、私は一寸東京へ歸つて來な
くぢやならない。』

『さう。』

と菊代は夢の話が飛んだ方へ行つて了たので、呆然してる。

『さう。』ちやなくてよ、夫れでね。』

と力を入れて、

『一寸私東京へ行つて来ますけれども直ぐ歸るから、貴女は此地に待つて入らつしやいな。貴女は別に歸るのを急ぎやしないんでせう。夫に筑波さんもまだ二三日は居るつて言ふんだから淋しかないでせう。』

『さうね。』

『夫でね、さうすれば私は最早氣に掛る用は無くなるから、又此地から他處へ行つても構はないし、何日まで此地に居ても好いから、何方にしろ一日二日で歸つて来るから待つて入らつしやいな。』

『けれども私も歸つても可いのよ、祖母さんにも久しく逢ないから……。』

『けわ共さ、夫ちや出憎くなるから待つて入らつしやいな、其代はり貴女のお宅へは私寄つて来て上げるわ。そして御祖母様に能く言つて来るから好いでせう。』

『さうね、さうして下されば、夫ち待つて可いわ。そしてあの、筑波さん一處だからつて言つて下されば尙安心するから。』

『さう。貴女の御祖母さんはなかく開けてるわ。夫ちや然して筑波さんは御迷惑ぢやありませんか。』

『否僕は……』

と之も少し煙に巻かれてる形。

『夫ちや私は直ぎに歸つて来ますから菊代さんは貴君に頼ひ申しますよ。』

『は。』

と頷いたが筑波は頬が熱くなるやうに覺れた。

おとよさん、采配を擔いで呆然してないで、今度の流車は幾時に出るか聞いて来て頂戴。』

下婢はあたふたと其儘帳場へ走けつける。

『露ちゃん、兄さんや此姉さんが鼠に引かないやうに、氣を付けてお呉れよ。』

お露は何かなし眞面目に深く頷いた。
『罪が無いね。』
三人は言ひ合したやうに笑ひ出す。

16 a / 17-19
新緑 上巻終

明治三十九年十二月廿五日印刷
明治三十九年十一月三日發行

新緑上巻
定價八十錢

著作者 小山内八千代

發行者 東京市京橋區金六町十三番地 石割太郎

印刷者 横濱市辨天通四丁目六十三番地 加川豊

印刷所 横濱市辨天通四丁目六十三番地 天閣印刷所

東京市京橋區金六町十三番地

發兌元 堺屋石割書店

複製 不許

新緑

下巻

一月下旬
發售

「新緑」幸に江湖の歡迎を享く、精緻圓熟の筆益々進んで彌々佳境に入る、局面いかに發展し行くかを見よ、心弱き筑波が戀の末はいかなる、菊代はいかに、一代の狹氣を背ひ空竹を割つたやうなお妻が胸底深く藏するものは何、校書かの字は如何、下巻新装世に出づる近きにも幸に大方諸彦の劉覽を乞ふ。

故森田思軒著

思軒全集

全四冊 廣津柳浪作 清方松洲畫

目次

- 第一卷 翻譯小説
 - 第二卷 小品及雜筆
 - 第三卷 小嘉波通信上
 - 第四卷 小嘉波通信下
- 第一卷 一月下旬發售

女波男波

定價六十錢
郵稅八錢

柳浪氏艶麗深刻の筆を驅つて從來の詩材を轉じ當代男女墮落學生の内面生活を活寫し題して女波男波とす現代學生の情狀掌に取つて見るが如し而も其間一味情の真あるもの一篇を貫けば讀むもの惻々の情に堪へざるべし更に顔の疵一篇を添ふ實に錦上の花也今や此等の佳作世に出づ幸に清讀を賜へ

1314
あ

小山内薫著

裏風草

近刊

泰西文藝に造詣深き小山内薫氏よりくりに
西洋名花を我文苑に移し植ゑられしもの、鳥
鳴き花笑ふ南歐の麗花あれば又風寒き北歐
の野に生ふるしならしき寒草あり、麗色玉
の如き、懐絶身に粟するもの、何れ外つ園ぶ
りの色より香高きを愛で賜へや。

木鐘

作村夏越細

神の世に木鐘といふもの存叩くに
法を以てすれば鐘々として響く然
らざれば黙々音を發せず取て以て
其詩集に命す作者の自負也又婉遜
也

近刊

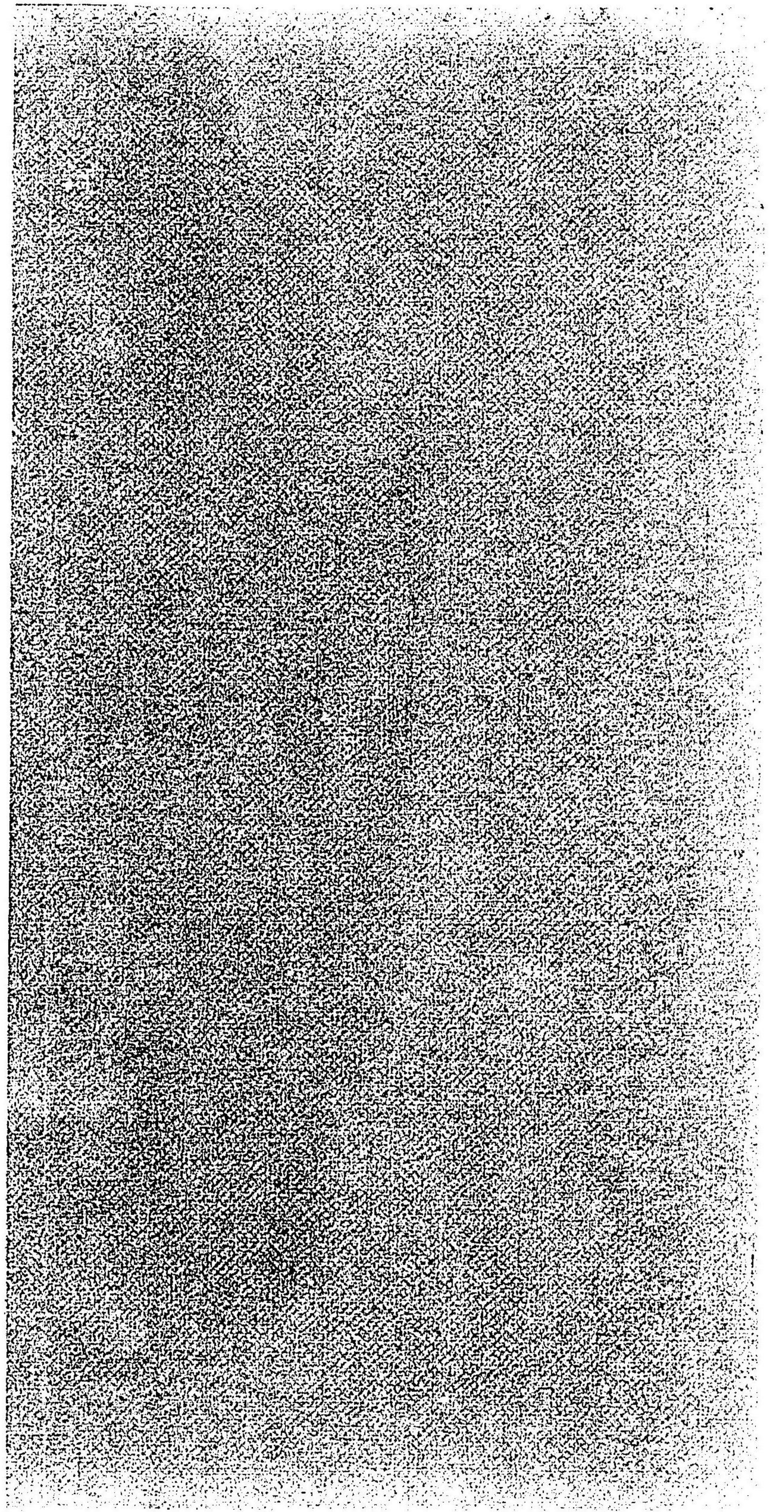
石人錄

作村夏越細

序に曰「題して石人錄といふ我人
の如く又石の如ければ也然り石の
如し我熱て燃ゆる能はず我冷て凍
る能はず……」是皆者電閃の感想
也眞摯の氣紙上に溢る活潑を賜へ

定價卅五錢

26
369



26
369

094210-001-7

26-369

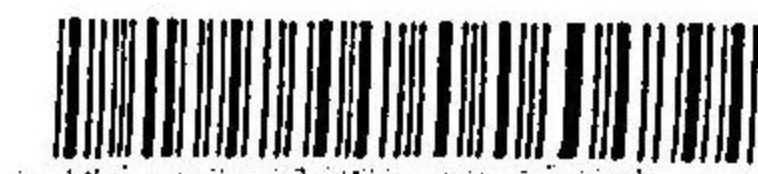
新緑

岡田 八千代/著
(旧姓:小山内)

上

M40

DBQ-1697



26. 7, 21